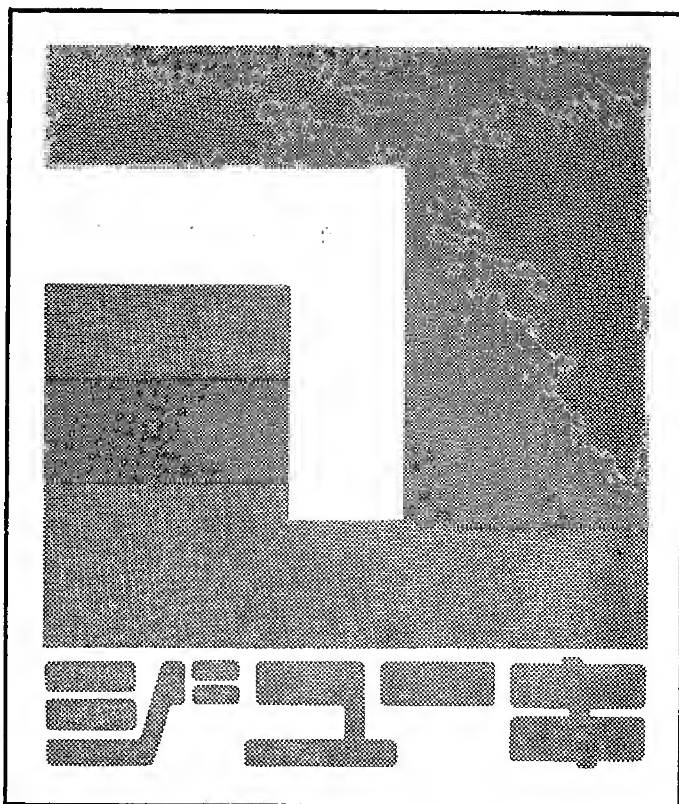
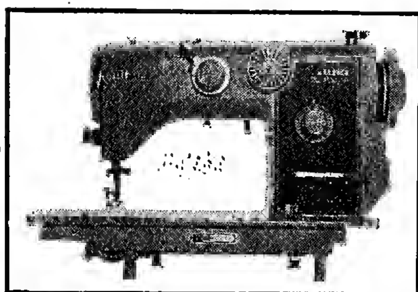
ミシンはマークで
お選び下さい





*HZD－956*型
ダイカスト・フルオートジグザグ

東京重機工業株式会社
本社工場　東京都調布市国領町８丁目２番地ノ１電話（480）1111番（大代表）

ハンドボール「第57号目次」

昭和43年9月号

表紙写真　全日本総合選手権・全長崎―大崎電気戦から
長崎新聞社提供

時評

どうなる世界女子選手権

――チェコ情勢の緊迫によって――

チェコには、ついにソ連などの諸国による武力圧力が入ってきてしまった。

多極化しつつあるといわれている各国の政治情勢、大国による小国への圧力が直接に間接に見られている。

ベトナムしかり、チェコまたしかりである。各人が自由に生きる権利をもつと同様に、各国はそれぞれの国民の意志によって、国の方針を決める権利をもっている。それを大国が単に大国の意志に従わないということだけで、ふみにじっていいものだろうか。このような情勢はスポーツの世界にも及ばない訳にはいかない。

8月22日の夕刊は、スウェーデン、デンマーク、ノールウェーの北欧三ケ国および西ドイツ、イギリスがソ連・東ドイツとのスポーツ交流を中止する方針を出したと報道している。

まだチェコへの武力介入がどのように展開するか明確な見通しはないので、このような傾向がどう動くかは判らないが、おそらく、より広い範囲に拡がっていくことが考えられる。

チェコのハンドボール関係者の身の上にも、種々の事件でおこっていることが考えられる。コーチのケーニッヒ、選手のピチャ、マレスなどといった人々はどのようにこの事件を受けとっているだろうか。ハンドボールどころではない毎日が続くことであろう。今後のハンドボール交流の上に大きな傷害になることは確かであろう。

早速に考えられることは今冬の世界選手権大会がどのようになるかは、全く予断を許さないことである。せっかく練習をつみ、今大会こそはといきごんでいる女子チームにとっては誠に気の毒な事態になる可能性が十分にある。

参加国を見ると、チェコのほかチェコに同情を寄せているユーゴー、ルーマニア。西欧圏が西ドイツ、デンマーク。ソ連圏としてソ連、東ドイツ、ハンガリー、それに日本が参加することになっている。ソ連圏が3ケ国、しかも開催国がソ連ということになれは、開催に一荒れも二荒れもあることを覚悟しなければならないだろうし、また開催されたとしても、諸国のボイコットもあることが予想され、果して実際に“世界選手権大会”になるかどうかも危ぶまれる。

我々として、主体的に決意を迫られる問題である。開催されたとしても、それに参加するかどうかを主体的に決定しなければならない。政治がスポーツに介入することはなぞとはいっていられない事態になるであろう。

平和裡に一刻も早く解決されることが望まれるが、多くのシコリが残ってしまうことになろう。（ＴＳＦＴで・8月22日記）

緊急速報　ＩＨＦは8月30日夜、今冬の世界女子7人制選手権の中止を決めたもよう。

全立教、大崎電気を降し優勝

～全日本総合選手権・長崎～

女子は大洋デパート栄冠

全国の強力チームを集めた第20回全日本総合選手権大会は8月6日から10日までの5日間、長崎市に新設された市営球技場に男子32・女子12チームが参加して行われた。

連日好天にめぐまれ、〃世界への雄飛〃をスローガンに男女とも内容のある熱戦を展開した結果、男子は全立教―大崎電気と日本協会推せんの両チームによる前年同ようの決勝戦となり、スピードに優る全立教が快勝、2年ぶり2度目の栄冠を握った。

女子は、大洋デパートと新進三菱鉛筆の優勝争いの末、大洋が後半巧みな攻撃で三菱を退け3年ぶり3度目の優勝を決めた。

なお、昨年女子の全日本四冠王となった田村紡は、主力の世界選手権代表7人が申し合せにより不出場のため、チーム力が低下して準決勝で敗退、惜しくも全国大会での連勝記録をストップした。

男子

▽一回戦

大崎電気（東京）43（23―4、20―2）6 土佐高OB（高知）

大崎電気は開始と同時に持てる力を十二分に発揮し、必死に斗いを挑む土佐高OBを全く寄せつけずに、前半で大差をつけ、後半もそのままのペースをもちつづけ、楽勝した。大差にもめげず、最後まで県命にプレーをつづけた土佐高OBの健斗はたたえられよう。

全長崎（長崎）38（22―12、16―6）18 東北学院大学（宮城）

国体を控え、強化に努めている全長崎は、大宮を中心とした多彩な攻撃を見せ、東北学院大学を降した。東北学院大は全長崎のペースにはまり、時折見せる速攻も、実を結ばなかった。また大きな敗因として、ディフェンスの弱さがあげられよう。

関西大学（大阪）26（15―12、11―9）21 住友化学菊本（愛媛）

関西学連の雄、関大と実業団の一方の旗頭、住化菊本の対戦は予想通りの好勝負になった。

速攻と遅攻と変化ある攻撃を見せた関大が終始リードを保ち、勝利を握った。住化のディフェンスの悪さが惜しまれる。

日体大（東京）30（17―3、13―9）12 福井教員（福井）

インカレ優勝の日体大は前半福井教員の食いさがりに合い、ややや苦しい試合であったが、後半になると、チーム全員がムラなく得点をとるようになり、大差をつけて勝った。前半良く日体大を苦しめた福井教員の斗いぶりは賞されよう。

東京教育大学（東京）30（15―4、15―8）12 常盤工業（岐阜）

一回戦期待の一戦であったが、東教大は試合開始早々より、サウスポー浅野の巧技を中心にして、得点を重ね、山田を軸にした常盤の反撃を押え、前半をリード。後半は東教大は自己のペースで得点を重ね、大差で勝った。

大阪経済大学（大阪）32（20―8、12―9）17 AOK栃木（栃木）

昇り阪の大経大と関東という激戦区を勝ち抜いたAOKの対戦は大経大、桐の3点連取にはじまり前半は大経大がやや勝るといった形勢であったが、後半に入ると、大経大は着々と得点を重ね、安全圏に入った。大経大は23分すぎから7点を連取し、差を拡げた。

中京大学（愛知）29（16―7、13―11）18 日本鋼管福山（広島）

インカレで多いに自信をつけている中京大は8分をすぎるころまで調子がでず、苦しんだ。前半とりつとられつのシーソーゲームが続いたが、後半開始後の中京大黒川の活躍などで一挙に点差を開き、勝負は決った。

中京大のムラのない攻撃陣はそれぞれが得点を重ね、勝利を中京大にもたらした。

大阪イーグルス（大阪）16（8―8、8―4）12 法政大学（東京）

期待の一戦であったが、大阪イーグルスが開始早々に迎えたチャンスをものにして、法大がもたつく間に、大いにとっておこうという攻めを見せ、前半は8―4、後半に法大の反撃が期待された。後半15分には、10―9と一点までつめより、18分には同点にしたが、その後、大阪イーグルスの攻撃にあい、5点を連取され、万事窮した。

芝浦工大（東京）21（14―6、7―11）17 三景（東京）

年次優勝チーム

	【男子】	【女子】
第1回	日体桜チーム	愛知クラブ
第2回	スワロー松チーム	オール山梨
第3回	スワロークラブ	芙蓉クラブ
第4回	セントポールクラブA	中止
第5回	全日体大	全静岡城北高
第6回	全日体大	全静岡城北高
第7回	西日本日体大OB	水海道二高
第8回	全日体大	半田高
第9回	全日体大	愛知紡
第10回	全日体大	愛知紡
第11回	芝浦工大	愛知紡
第12回	芝浦工大	愛知紡
第13回	芝浦工大	愛知紡
第14回	大崎電気	愛知紡
第15回	立教大学	大洋デパート
第16回	大崎電気	大崎電気
第17回	大崎電気	大洋デパート
第18回	全立教大	大崎電気
第19回	大崎電気	田村紡
第20回	全立教大	大洋デパート

一回戦の中では、特に注目された一戦。三景はベテラン江名、尾形に新人の内藤、高梨が巧く組み合い、ムラなく得点を重ね、前半芝浦工大を圧っした。芝工大は前半4点のリードを後半開始されるや激しく追い10分に12−12とタイにこぎつけ、その後は常に優位にたちながら、試合を進めた。三景も15分、21分に再度タイにもちこんだが、25分をすぎて、芝工大に4点を連取され、力つきた。

熊本クラブ(熊本) 20（10−8 10−10）18 山口大学(山口)

実力伯仲の試合であったが、展開は異っていた。熊本が前半のリードを保ち、後半終了間際に見せた山口大学の必死の追いこみをしりぞけ、二回戦に進んだ。

中央大学(東京) 31（16−13 15−11）24 全広島(広島)

好試合が期待された一戦。全員かムラなく得点をあげる中央と、市原、近森がまとめて点をとる全広島。その差が得点差となって現われた。全広島の今後の精進を期待したい。

同志社大学(京都) 19（6−5 13−9）14 埼玉教員(埼玉)

関西学連のナンバーワンの同大と教員界の古豪埼玉教員の対戦。

同大はすべり出し好調に4−0までリード。これに対し埼玉は、結城一人によって15分以後5点をあげ、前半6−5で終了。後半同点になること4度びのシーソーゲームを展開したが、27分をすぎてからの同大の4点連取によって試合は決定した。両チームとも非常に波のある試合であった。

東北大学(宮城) 18（8−6 7−9 0−0 3−2）17 佐世保クラブ(長崎)

地元佐世保クはよくガンバリ、前半の2点のリードを後半よくはねかえして、一時はそのまま勝利を握るかに見えたが、東北大学の追いこみに会い、延長戦となる。延長後も一進一退を続けたが、二瀬のシュートで試合は決った。

明治大学(東京) 30（15−5 15−7）12 宗形製作所(大阪)

宗形は先取点をあげたが、その後明治の攻撃に着々と加点され、大差をつけらてしまった。明治は藤井が大量11点をあげる大活躍をした。

関西学院大学(大阪) 31（12−9 19−4）13 桜丘会(愛知)

前半は一進一退の好ゲームであったが、後半になると、関学は着々と点差を拡げ、名門桜丘会を一しゆうした。

全立教大学(東京) 33（18−8 15−10）18 奈良クラブ(奈良)

昨年準優勝の立教大学のメンバーで対戦する全立教は最初から相手をよせつけず、着々リードしていった。一方奈良クブも鳥井、西村を中心に良く食い下った。奈良クラブの善戦は賞されよう。

▽2回戦

大崎電気 38（16−8 22−8）16 全長崎

全長崎の健斗がたたえられる一戦。技術、体力ともに秀れた大崎が多彩な攻撃を展開し、得点を重ねた。

一方全長崎はGK河田、FP大宮らの活躍があったが、その差はいかんともしがたく、大量点を許してしまった。長崎国体を控えた全長崎の精進を期待したい。

日体大 24（13−8 11−8）16 関西大学

日体大は早川、森を軸にして、多彩な攻撃を加え、15分には8−0と大差をつけた。一方関大もその後速攻、ポストプレーにより得点を重ね、13−8で前半終了、後半たちあがり、日体大のミスに乗じ3点を連取し、2点差と迫ったがついに力及ばなかった。日体大を苦しめたファイトは多いに賞されよう。

東京教育大学 29（13−7 16−7）14 大阪経済大学

昇り坂の大経大がどこまでやるかに興味が集った。15分まで3−2と均衡を保っていたが、そのあとの5分間に教育大に5点連取され、前半13−7で終了。後半立ちあがりにも、教育大に5点連取され、大勢は決っした。一人よく9点を挙げた大経大桐の活躍は気憶さるべきものであろう。

大阪イーグルス 22（12−8 10−8）16 中京大学

実にめまぐるしい得点経過をとった一戦、10分中京4−1、15分4−3、20分5−6、32分8−6そのあと7分間にイーグルスが6点連取して前半終了。後半はイーグルスが前半の優位を保ちつつ、15分には19−12と絶対的に優位にたったが、その後、中京に5点連取され、25分には一点差となり、試合は残り5分の勝負となった。

イーグルスは福井の活躍で中京をつきはなし、準々決勝に進むことができた。

芝浦工大 28（13−9 15−2）11 熊本クラブ

芝工大は立ちあがり、速攻とロングシュートで大きく点差を開いたが、20分をすぎるころから、ミスがめだち、ここをつかれて、点差をつめられた。後半に入ると、速攻で熊本を圧倒、大量得点をした。熊本は遅攻で善戦したが、7mスローの失敗と、帰陣の遅さとで、芝工大の大量得点を許した。

同志社大学 27（13−11 14−14）25 中央大学

追いつ追われつのシーソーゲームを展開、しかも両軍20点以上の得点をするという、見るものにとって誠に面白い試合となった。同志社は前半の2点のリードを後半中大にしばしばリードを奪われながらも、守りきり、準々決勝に辛じて進んだ。

明治大学 22（10−6 12−4）10 東北大学

立ちあがりから明大は優位にたち、東北大の攻撃を全くよせつけずに勝利を握った。

全立教大学 35（20−6 15−5）11 関西学院大学

全立教は木野の先取点にはじまり、多彩な攻撃で着々点差を開き前半20−6と大差をつけ、大勢を決めてしまった。後半もおとろえることなく、得点を重ね、関学を一しゆうした。

大崎電気、日体大を破る！

▽準々決勝

大崎電気 23（12−10 11−9）19 日体大

【日体大】

	選手	得
GK	加藤	0
GK	本田	0
FP	森	4
FP	瀬島	1
FP	大川	0
FP	早川	3
FP	斎藤	3
FP	藤中	5
FP	谷藤	0
FP	笠原	1
FP	塩崎	2

【大崎】

	選手	得
GK	福本	0
GK	下里	0
FP	井上	8
FP	西村	4
FP	近藤	5
FP	片山	2
FP	飯田	1
FP	竹野	3
FP	旗野	0
FP	谷口	0
FP	太田	0

主審 岡村

23 (2) 7MT (3) 19

インカレに初優勝し、その余勢をかって、総合をもという日体大二連覇をめざす大崎電気。優勝の行方を大きく左右するこの一戦、前半戦は両チームともエリア前での早いボール廻しから、ポストに入れる作戦を主として使っていたが、ベテラン竹野がリードするだけ、大崎の方が上であった。終了

近くに竹野が2点を加え、12—10と2点をリードして前半を終了。
後半に入ると、大崎はミドルシュート、サイドシュートをおりまぜ一挙に6点を連取して、点差を開いた。日体大は走ることを忘れ、ただボールを廻すだけになり、その後やや立ちなおりを見せたが、ついに及ばなかった。
日体は、日頃のシャープなカットインが見られず、竹野、井上の好リードによって攻撃する大崎の老巧さにしてやられ、二冠の野望はならなかった。

東教大はイーグルスに快勝

東京教育大学 15（6—6、9—3）9 大阪イーグルス

得	【東教大】		【イーグルス】	得
0	上野	GK	広川	0
0	仲尾	GK	島崎	0
1	古屋	FP	福井	1
5	稲垣	FP	樫塚	0
2	畑	FP	東	2
1	平岡	FP	井上	1
5	浅野	FP	青木	5
0	斎藤	FP	北岡	0
0	梁川	FP	加藤	0
1	水藤	FP	松尾	0
0	森	FP	山崎	0
15	（0）	7MT	（2）	9

（主審 穴戸）

ゆっくりしたペースで試合は進み、得点は6—6と前半少なかった。イーグルスは青木を中心に得点を挙げ、一方東教大は稲垣を中心に得点を重ねた。
後半に入ると東教大は若さと脚力にものをいわせ、イーグルスの遅攻ペースを自らの速攻ペースに巻きこみ、ふりきった。
6—6で始った後半、11分まではそれぞれ二点ずつをあげ、8—8と均衡を保っていたが、それ以後の浅野を中心にした攻撃にイーグルスはなすところなく、東教大に6点を連取され、勝利から見放なされた。
若さが老巧さを制した一戦といえよう。

同志社大後半に いたり力つく！

芝浦工大 26（12—12、14—6）18 同志社大

得	【芝工大】		【同大】	得
0	高橋	GK	和保	0
0	杉山	GK	二橋	0
7	秦	FP	松浦	2
6	村上	FP	舟木	4
1	山中	FP	高橋	0
2	白神	FP	町田	2
3	高鍬	FP	光田	0
0	大矢	FP	大羽	0
4	大江	FP	中井	6
1	新実	FP	阪野	0
2	森	FP	中野	4
26	（2）	7MT	（3）	18

（主審 中西）

ゲーム開始直後、芝浦は村上が7mスローを決める。同大も中井のサイドシュートなり同点。両チームともポストプレーを主にして得点を重ねるゲーム展開。
芝浦がリードし、同大が追いつくというゲームで、前半同点になること三度びというデットヒートを続け、同点で終る。
後半も芝浦がリードし、同志社が一点差に迫るという経過で15分まではきたが、15分以後、秦の3点連取にはじまる芝工大の速攻の前に破れた。
後半なかばまでは機敏な動き、スピードあるカットインと両軍ゆずらぬ戦いぶりであったが、15分をすぎるころから、疲れのためか同志社は横パスが多くなり、これを芝工大にカットされ、もちまえの速攻に結びつけられ、大量点をとられてしまった。

明治前半の活躍 良く全立教を苦しめる

全立教大 24（11—8、13—4）12 明治大学

得	【立教】		【明大】	得
0	川口	GK	田中	0
0	馬渕	GK	藤森	0
5	木野	FP	田辺	2
2	北村	FP	鈴木	2
6	野田	FP	兼子	3
7	東	FP	藤井	2
1	小野口	FP	野村	1
0	戸田	FP	鈴下	2
0	倉前	FP	佐田	0
2	有永	FP	浦野	0
1	加藤	FP	末田	0
24	（5）	7MT	（2）	12

（主審 遠藤）

立ちあがり、明治は良く走り立大の防禦の甘さをつき、リードする場面もあったが、24分8—8まで、その後、木野、北村に決められ、3点差で前半を終了。
後半に入ると、全立教は、東、木野、小野口、東と4点をとり、安全圏に入るとともに、完全に自軍ペースで試合を進め、一方的な試合となった。
暑さからくる疲れのためにラフプレーが続出したが、これは誠に残念である。
前半の明治の食い下りは大いにたたえられよう。

大崎電気全く 東教大をよせつけず

▽準決勝

大崎電気 23（12—5、11—7）12 東京教育大

得	【教大】		【大崎】	得
0	上野	GK	福本	0
0	仲尾	GK	下里	0
0	古屋	FP	井上	2
5	畑	FP	西村	2
0	稲垣	FP	近藤	6
1	平岡	FP	片山	1
5	浅野	FP	飯田	5
1	斎藤	FP	竹野	6
0	梁川	FP	籏野	0
0	水藤	FP	谷口	1
0	森	FP	太田	0
12	（2）	7MT	（1）	23

（主審 島田）

立ちあがり、東教大は自らのミスを大崎にもちこまれ、2点を先取された。これで東教大はあせり気味になり、ふだんの実力はかげをひそめ、やや浮足だったところを、大崎井上にパスを狙われ、カット→速攻のくりかえしとなった。更に大崎のディフェンスが崩せないので、無理な位置からのシュートを連発し、キーパー福本の好餌となり、ここからも速攻の糸口を大崎に与えていた。
後半になっても、この傾向は変らず、エリア前でなんの目標もなく、廻すパスを井上を中心にしてカットされ、どんどん傷口を大きくしていった。ついにはダブルスコアに近い得点差をつけられ、教大は大崎に完敗した。
前半やられたことを後半そのまま続けられるのは、チーム全員一工夫あってしかるべきであろう。
大崎では井上のカットプレー、竹野の一段と磨きのかかったしぶいプレーがめだった。大崎の老巧と貫録勝ちという感を深くした試合であった。教大では良く得点をした畑・浅野の活躍がめだった。

全立教、芝工大に楽勝

全立教 23（13—9、9—9）18 芝浦工大

得	【芝浦】		【立教】	得
0	高橋	GK	川口	0
0	杉山	GK	馬渕	0
2	泰	FP	木野	7
3	村上	FP	北村	1
0	山中	FP	野田	6
0	白神	FP	東	2
3	高鍬	FP	小野口	7
2	大矢	FP	戸田	5
4	大江	FP	倉前	1
1	新実	FP	加藤	1
3	森	FP	有永	2
18	（3）	7MT	（3）	32

（主審 岡村）

芝工大先取点はあげたが、その後10分をすぎてから、ミスにつけこまれ7点を連取され、全立教ペースで試合は進んだ。全立教は芝工大のミスを巧みにつき、速攻・ポストプレーを中心にした攻撃で得点を重ね優位にたった。芝工大も20分をすぎるころから反撃をし得点をかえしたが、およばず13—9で前半を終了。
後半に入ると両チームとも積極的にゲームを展開していったが、全立教が着々加点するのに反し、芝工大の得点はのびなかった。

結局木野、野田の好リードで全立教は終始自己のペースを守り、芝工大をよせつけず楽勝した。

両チームとも、後半ラフプレーが多く、試合中、選手同志のトラブルが見られたことは好ゲームであっただけに惜しまれる。全選手はもっと冷静にプレーすべきである。

大崎、二連勝ならず

▽決勝

全立教 23（12－6, 11－8）14 大崎電気

【立教】	得		【大崎】	得
川口	0	GK	福本	0
馬渕	0	GK	下里	0
木野	7	FP	井上	7
北村	1	FP	西村	0
野田	6	FP	近藤	2
東	4	FP	片山	0
小野口	2	FP	飯田	3
戸田	1	FP	竹野	2
倉前	0	FP	籏野	0
加藤	0	FP	谷口	0
有永	2	FP	太田	0
23（3）		7MT	14（2）	

（主審 中西）

互いに手のうちを熟知している両チームがどういう作戦に出るかが興味の中心であったが、全立大に数回のコンビプレーが見られたぐらいで、前半は個人技による得点がほとんどであり、常時のリラックスは見られなかった。特に大崎はほとんど攻撃のめもつかめぬままにおわった。

後半10分までは、両チームとも一点づつで、得点を加えることのできない停滞状態がつづいた。

大崎はベテラン井上の活躍によって、19分6点差に迫り、この試合のヤマを迎えたが、木野のロングシュートにはじまり、野田の3点連取があり、25分には10点差になり万事窮した。大崎は前日までのコンビプレーが全く見られず、大差で破れさった。竹野が最後までベテランらしい味を見せ健斗した姿は賞されよう。

女子

▽女子予選リーグA組

全福井（福井）15（6－2, 9－4）6 大洋紡（岐阜）

全福井は大洋紡の先取点にもめげず、5～7分3点を連取し、自らのペースにもちこみ、前半を6－2で終了、後半も10分までに4点をあげ、安全圏に入り、そのまま押しきった。

田村紡（三重）11（4－4, 7－3）7 全福井

【田村】	得		【福井】	得
坂上	0	GK	山方	0
信藤	0	GK	石田	0
甲村	3	FP	万	1
吉開	2	FP	池端	0
渡辺信	4	FP	立林	4
若林	0	FP	高木	1
辻	1	FP	内海	0
久保田	0	FP	土田	1
三毛	1	FP	細川	0
広森	0	FP	友田	0
金田	0	FP		
11（1）		7MT	7（0）	

（主審 佐々木）

田村紡は全福井の健斗にあり、大いに苦しんだ。前半全福井の立林の先取点で始ったこの試合、15分には、田村紡3－1とリードしたが、その後全福井に3点を連取され、3－4とリードされた。24分に吉開の得点によって、4－4とタイで後半を迎えた。後半は渡辺信の活躍で4点をリードしたが、23分には立林のシュートで2点差に迫られた。その後2点を連取しことなきを得たが、全福井の立林を中心にした攻守は大いに賞されよう。

田村紡 23（13－2, 10－5）7 大洋紡

速攻、遅攻と多彩な攻撃で攻めまくる田村紡に対し、大洋紡はゆっくりとボールを廻し、再三、速く攻めるよう注意を受けた。

大洋紡はエリア近くでボールを廻すのが精一杯で、これを田村紡にカットされ、速攻にもちこまれ大差をつけられた。しかし、大洋紡の真面目なプレーはほめるべきである。

A組順位 ①田村紡（決勝トーナメントへ）②全福井③大洋紡

▽同B組

全夙川（兵庫）10（4－2, 6－3）5 佐世保商（長崎）

全夙川は前半から、西田、加藤の活躍で自己のペースにもちこみ後半も加藤、伊山、西田の活躍でそのまま押しきった。一方地元の佐世保高は友川、内川で良く健斗したが及ばなかった。

大崎電気（埼玉）23（12－0, 11－0）0 佐世保高

大崎は前半開始後10分まで点がとれずに苦しんだが、日向野、木幡らの活躍で大量点をとり、前半を終了。後半もまんべんなく点をとり、守っては佐世保商を零敗させる巧守を見せ、全く危げなく、大勝した。

大崎電気 18（8－3, 10－5）8 全夙川

【大崎】	得		【夙川】	得
川崎	0	GK	柏原	0
山田	0	GK		
山崎	1	FP	石本	1
中野	4	FP	松原	0
栗林	1	FP	吉岡	1
木幡	2	FP	吉田	0
神藤	2	FP	加藤	2
三浦	3	FP	伊山	0
日向野	4	FP	西田	3
荒川	0	FP	平山	1
新鳥	1	FP		
18（2）		7MT	8（0）	

（主審 島田）

練習量と経験に勝る大崎は終始夙川を圧倒していたが、大崎は攻守に甘さが目立ち、優位にたちながら、プレーにさほどのシャープなものが見られず、点差のわりには苦戦であった。一方夙川は凡プレが数多く見られたが、粘り強く大崎に喰い下った。大崎は勝利を得て、決勝トーナメントに進出したが、一層攻守の詰を研究する必要があろう。

B組順位 ①大崎電気（決勝トーナメントへ）、②全夙川③佐世保商

▽同C組

東京重機（東京）31（13－4, 18－2）6 島原農（長崎）

経験・技術・体力ともに勝る東京重機はスタートよりとばし、どんどん点を加えていった。一方島原農は良く斗ったが、実力差はいかんともしがたく、大敗した。

東京重機はFP全員得点という記録的な大勝をした。

三菱鉛筆（神奈川）24（12－2, 12－4）6 島原農

三菱も前日の重機同様に最初から得点を重ねた。島原農も前日の大敗にめげることなく良く斗ったが、実業団のトップチームには、抗すべくもなかった。

三菱鉛筆 8（4－3, 4－2）5 東京重機

【重機】	得		【三菱】	得
高野	0	GK	吉田	0
川本	0	GK	本庄	0
山本	1	FP	三井田	1
畑岡	0	FP	落合	3
滝口	2	FP	佐々木洋	0
島田	0	FP	江川	0
鷺谷	0	FP	佐々木房	0
市塚	0	FP	阿部	0
牧野	2	FP	小田島	1
山本	0	FP	姫野	3
才崎	0	FP	藤原	0
5（0）		7MT	8（2）	

（主審 金沢）

補強なった両チームがどのような戦いぶりを見せるかが興味の中心であり、予選リーグ中では、D組の大洋デパート対日体大戦とともに注目の一戦であった。

三菱は前日休ませた期待の新人姫野を入れた布陣で対戦、たちあがり、重機は新人牧野の2点と山本の1点によりリードしたが、三菱は姫野のミドルシュートで盛り返し、前半を4－3で終了。

後半は重機の攻撃が単調になり凡ミスが出るところを三菱が巧みにつき、落合の2本の7mを含む4点で押しきった。

防禦の差がそのまま得点の差になって現われ、勝敗をわけた、

C組順位①三菱鉛筆（決勝トー

ナメントへ)、②東京重機③島原農

▽同D組

日体大(東京) 10（5－4 5－5）9 ブラザー工業(愛知)

好ゲームを展開した。スタートはブラザーが好調に2点を先取、日体大は10分をすぎるまで、点がとれず、苦労したが、20分をすぎるころから、石井、石井、永田と決まり前半を5－4と一点リードして終了。後半すぐブラザーが一点を帰し、同点としたが、川口が2点、古川が3点と得点を重ね20分には10－6と4点差になり、20分以後のブラザーの攻撃を3点に食いとめ、1点差で辛勝した。

大洋デパート(熊本) 24（11－2 13－4）6 ブラザー工業

前日の日体大戦で良く食いさがり、この試合も好試合が期待されたが、大洋はスタートから自己のペースを堅持して、着々と得点を重ね、前半で勝負を決めた。

後半もそのままのペースで試合は進み、大洋デパートが大勝をし決勝へ進出する足掛りをつかんだ。

大洋デパート 9（5－2 4－5）7 日体大

前半日体大は時間をかけた攻撃で大洋に対した。セットオフェンスで対抗しているのだが、今一歩の歯車がかみあわす、パスミスを速攻に結びつけられ、大洋に得点

得	【大洋】		【日体】	得
0	安部	GK	小野里	0
0	有働	GK	秋間	0
6	新保	FP	川口	3
1	米	FP	原	1
0	渡辺	FP	津熊	0
1	射場	FP	中村	1
0	田中	FP	佐藤幸	0
1	枝尾	FP	石井	2
0	三宅	FP	古川	0
0	下枝	FP	佐藤温	0
0	島田	FP	永田	0
9	(0)	7MT	(3)	7

(主審 佐々木)

を重ねられた。

後半は日体大のこの戦法が実を結び、追いあげたが、及ばなかった。後半の大洋は速攻のチャンスにもミスが目立ち、確実に得点することができず、日体大のペースにはまり、苦戦となった。日体大の作戦が善戦の因であろう。

D組順位、①大洋デパート(決勝トーナメントへ)、②日体大、③ブラザー工業

大洋、田村紡に圧勝

▽準決勝

大洋デパート 15（8－2 7－6）8 田村紡

得	【田村】		【大洋】	得
0	坂上	GK	安部	0
0	信藤	GK	有働	0
6	甲村	FP	新保	6
1	吉開	FP	米	1
0	渡辺	FP	渡辺	2
1	若林	FP	射場	3
0	辻	FP	田中	1
0	久保田	FP	枝尾	2
0	三毛	FP	三宅	0
0	広森	FP	下枝	0
0	金田	FP	島田	0
8	(3)	7MT	(1)	15

(主審 野村)

試合開始後、30秒で大洋のスクリーンプレーが見事に決まり、そのあと大洋が2点の連取、これによって、若い田村はすっかりあがり、ゴール前のパスミス、カットにより、再三大洋のノーマークのチャンスを生み出した。しかし大洋はこれを生かすことができず、田村は救われていた。しかし、田村の前半の攻撃は全く冴えず、わずかに甲村の2点のみ。後半に入りやっと田村は落ちつきをとりもどし、対等に戦ったが、前半の失点は余りにも大きく、大洋の軍門に降った。大洋の勝因の第一は田村の走りをとめてしまったディフェンスに求められる。

三菱、大崎を後半離す

三菱鉛筆 13（2－1 11－1）2 大崎電気

得	【三菱】		【大崎】	得
0	吉田	GK	川崎	0
0	本庄	GK	山田	0
1	三井田	FP	山崎	0
6	落合	FP	中野	0
1	佐々木洋	FP	栗林	0
1	江川	FP	木幡	0
1	佐々木房	FP	神藤	0
2	阿部	FP	三浦	0
1	小田島	FP	日向野	2
0	姫野	FP	荒川	0
0	藤原	FP	新島	0
13	(3)	7MT	(0)	2

(主審 狩野)

前半両チームとも固くなったためか、パスミス、シュートミスが目立ち、お互いにせめあぐみ、あげた得点は三菱が佐々木房の1点と落合の7MTによる2点、大崎は日向野の1点、両チーム合せ3点という得点であった。

後半三菱は大崎のディフェンスの乱れから、サイドからのシュートをたて続けに成功させ、試合の主導権を握り、全く一方的なゲームにして、大崎をしりぞけた。三菱は主導権を握れたことと、7MT3本を含む6点を挙げた落合の活躍によって、大勝をした。大崎は前半に得た速攻のチャンスを再三逸っしたのは非常に残念なことだった。

大洋、後半で決める

▽決勝

大洋デパート 12（5－5 7－5）10 三菱鉛筆

得	【大洋】		【三菱】	得
0	安部	GK	吉田	0
0	有働	GK	本庄	0
4	新保	FP	三井田	0
1	米	FP	落合	6
3	渡辺	FP	佐々木洋	0
2	射馬	FP	江川	0
0	田中	FP	佐々木房	1
2	枝尾	FP	阿部	0
0	三宅	FP	小田島	0
0	下枝	FP	姫野	2
0	島田	FP	藤原	1
12	(0)	7MT	(4)	10

(主審 狩野)

立ちあがり、両チーム少し固さが見え、いたずらに走るのみだったが、大洋の得点により、やや固さもとれ、大洋が先行し、三菱がそれに追いつくといった形で5－5の同点で終る。

後半はスタートから大洋がおしまくり、15分には、11－6と大差をつけた。三菱がこれを追い、2点差にまで迫ったが、ついに及ばなかった。

三菱はチーム結成以来、初の全国大会決勝戦出場であり、特に固さがめだった。しかし、5点差か

ら、2点差までつめたその頑張りは賞されよう。

大洋は新保を中心にして、良くまとまり、主力選手が平均した得点を見せた。一方三菱は江川が良く7MT4本含む6点をとり、気をはいた。

三菱は決勝戦初出場というハンディキャップをついに克服することができなかったことと、落合、姫野を十分に生かしきれなかったことが敗因であった。今後の三菱の成長を期待したい。

全日本総合を顧みて

荒川清美（日本協会理事長）

20回目を迎えた本大会も、ミュンヘン・オリンピックという大課題を控えて、いっそうの充実と盛りあがりを示し、男女とも熱の入った好試合が多かった。

男子優勝の全立教はさすがに洗れんされた攻守を示し、緩急の判断（展開力）のよさ、攻撃面積の広さ、チーム全体のボールキープ力等々どれをとっても抜群で、その優勝は順当だった。

木野、北村の両OBは、むしろ昨シーズンよりも「生きたプレー」を見せて栄冠の原動力になっていた。野田、東、GK川口ら現役勢も持ち味を存分に発揮していた。

連勝を狙っていた大崎電気は、難関の日体大、東京教大の両学生チームを降して決勝進出を果したものの、主力選手が絶頂期をすぎ、後続選手の力も未だしで総合力のおとろえを感じさせた。

学生選手権優勝の日体大は高橋ら主力が就職試験のため揃わずよい出来ではなかった。

東京教大、芝浦工大、大阪イーグルスも力に不足はないが、大会の格からいってもトップチームとして、もう少し内容的に高いものを望みたい。

同志社大、明治大の活躍は、ともに奮起を望まれている立ち場だけに喜ばしい。いっそうの精進を期待しておこう。

そのほかでは三景の成長が注目された。若手の伸びで好感のもてるチームにまとまっている。国体（10月・福井）での健斗が楽しみだ。惑星視されていた法政大、中京大は試合構成力にもう一工夫欲しい。

女子は、世界選手権代表12人の欠場で、なかみの低下が予想されたが、その心配はなかった。上位チームの選手層の厚さ後続チームの成長にほかならない。

しかし、昨年の4冠王・田村紡や大崎電気は攻守の要を抜かれてチームとしての迫力はかなりマイナスされ、例年ならばいちばん白熱する準決勝（決勝トーナメント1回戦）が味気ないものになった。

優勝した大洋デパートは新保、枝尾、渡辺らを中心に全員がよく走り、順当な結果となった。

三菱鉛筆は男女を通じてもっとも進境の著しいチームだ。

決勝戦は、緊張からか実力を活かし切れなかったが、今大会の成績がいっそうの自信となれば、シーズン後半は、その地力をフルに示すことができるだろう。

学生界の常勝・日体大は大洋デパートに前半互角の戦いを見せたが、リードを許すと「大洋」の名の先入感に負けて、ベストフォア入りを果せなかった。

そのほかでは東京重機工業、大洋紡、全福井らの試合ぶりが目についた。

大会全般を通じての印象では、審判（判定）面のトラブルが皆無といってよかったことをあげたい。5月の全国審判員研修会の成果といってよいだろう。

余談になるが、このことに限らず画一した政策を日本協会は今後積極的にこうじていきたい。（談）

（21頁より）

先年青島製粉会社の社長を引受けた際、青島でその披露宴を催さうとした時に、北京（今の北平）の新聞にこんな記事が出た。「横浜の富豪平沼専蔵氏の息来る。氏の父は一代にして巨万の富を為す。富を為せども仁を為さず。郷党之を憎む甚し」と書き、その息が青島製粉を引受けたから、皆用心しろというのである。この記事を見て、披露宴に出席を断わる者もありそうな形勢になった。幸い当時時事新報の北京支局長だった鷲沢与四二君が、別に自分で発刊していた邦字新聞に、北京新聞の記事は誤りで、氏の父は専蔵ではなく、母は日露戦争の際、出征兵士を日夜附近の平沼駅で送迎している中に誤って轢死したほどの愛国者の息である、と説明してくれたので、招待者は全部出席したといふこともあった。

母君の訓育と夫人内助の功

本稿を草する為、筆者は御無沙汰していた平沼家をお訪ねし、未亡人ふみ子氏に御目にかかり、種々材料を拝借し、又お話を承った。氏は平沼氏の母堂千代子氏について、「お母様は非常に厳格な人で、主人とは全く異った性格を持たれ、その意味では秀れた方でした。きびしい一面、よく行きとどく方で、出征軍人を平沼駅に送られた時なども沢山の餡パンを抱えて行かれ、短い停車時間に一人でも多くの軍人さんに差し上げようと夢中になり、既に動き出した列車とフォームの間に落ち込んで亡くなられたのです。お母様は市から戦没者と同じ扱いを受けて葬られ、今、その碑は三沢公園にある、主人が聖火を捧げて立つ像の近くにあります。」と言われた。

又、筆者はふみ子氏に対し「御主人は御在世当時、所謂、愛妻家として知られた方でしたが、そうされたのは、貴女様の側にそれだけのことがあったからでしょう。何か内助の功とでも申上げることについて伺い度いものです」と申し上げたら、氏は「ああ、私のような甲斐性のない者に何も内助の功などありません。つまり、何もしなかったのがよかったのでしょう。ああ松本さん、その『よかった』と言う言葉は取消します。まあ、私が主人に対して為したことは、害にならなかったとゆう程度のことでしょう。」と言われた。

数年前にこれと同じようなお話をした事があるが、氏は「何も出来ませんが、朝、主人が出かける時と、夕方帰宅する時には、つとめて笑顔をします。」と言われたのを思い浮べた。

生涯を通じ、勤勉と誠実につきる人格を養い、汚れなき人間性を堅持した巨人、平沼氏の蔭に、型こそ違うが、完全の没我の此二女性のあったことを想ひ、尽きぬ日本文化の高雅さに感銘しつつ懐しい沢渡のお邸を辞した。

向上認めるが課題も多い

～全日本学生選手権をみて～

村田弘

○……優勝した日体大は、攻撃において、全員よく走り、巧さとスピードに乗って、個人の持てる力を存分にふるえたのが第一勝因である。

ディフェンス面でも好守のGK本田を信頼し、組織的な動きを見せていた。ただ、後半に入って追いあげられ、それまでの〝点差〟に助けられたケースが決勝（対芝浦工大）でもみられたが、これは得点が開き、気分的にホッとしたところで表われたものでありゲームスタミナの配分に問題点があったのと、数多くのコンビネーションに迷ったことが原因といえる。

○……芝浦工大は、優勝戦まで伝統の速攻と、爆発的な攻撃力・シュート力に威力を示し、相手を寄せつけなかったが、決勝では攻防の連繋が悪く、ミスを続出して敗退してしまった。左腕3人を持ちながら、その特長を活かしたコンビネーションプレーのなかったことも惜しまれる。また、リードマン・高鍬が大会前に負傷し、欠場していたのも、チームプレーのまとめの上で大きなマイナスとなっていた。決勝戦でこそキャリアの不足で活躍できなかったが、新人の新実（桜台高）のシュート力や大江（岩国工）の突進力は今後に大きな期待をよせることができる。

○……この大会でいちばん見応えのあったのは日体大—立教戦（準決勝）だ。両校とも死力をつくしての一進一退から、同点のまま延長戦に入り、体力と選手層に勝った日体大の勝利に終ったが、相手のわずかなスキにうまく得点をいれあった展開力・判断力はさすがであった。

立教は2年生以下が試験で、充分な練習ができず、野田、東に負担がかかりすぎ、本来のセット・オフェンスの歯車がうまくかみあわず、長身有永が前半は得点したものの、病後の未整調から後半へばりシュートが決まらなかったも悔やまれよう。

○……ベストエイトに関東1部7校と中京大（東海）が残ったことは、現在の〝学連の力〟を物語っている。

関西学連の低迷に反し、東海の躍進は見逃せない。特に中京大が各試合にみせた走って得点に結びつけるセットプレーは見習うべきものがある。

強いチームと地方のチームとの差が大きく、このままでは大会が盛りあがらない。試合形式（大会方法）を変える時機に来ているのではないか。高い費用を使って地方から参加し、1試合で負けて帰るようでは意味がないし、技術向上も望めない。

○……本年は昨年のような木野、北村（ともに立教）近森、山田（ともに芝浦工大）といった優秀なプレィヤー及び絶好のコンビは見られなかったが、全体的なチーム、個人のレベルアップは認めてよいだろう。2年後の世界選手権、さらにミュンヘンオリンピックの強化選手（仮称）には、今の学生界から、数多くのプレィヤーが選ばれ、その中心になることと思う。

○……技術的問題では、基礎技術がいつものことながら不じゅうぶんである。基礎的プレーのミスが勝敗の別れ目になっている。又ボディーバランスが悪い。全選手に一言いおう。「シュートは決めるべきもので、これがハンドボールだ」。攻撃は変化に富んだスピードのあるコンビネーションプレーを使うべきだ。ブロックプレーもやっているが、まだ無茶なプレーが多く、反則に該当するのが多い。たまたまブロックしたからシュートに入るのでなく、プレーが展開してきたからブロックをしてシュートをさせるようにならないといけない。今日の学生で、一番大きな問題は防御がまずいことである。あれでは勝てない。はっきりした防御のフォーメイションを持ち、練習しなければならない。ボールを対称としないまた荒い防御の多いことは感心しない。しかし、本大会でユニホームをつたかむ者がいなかったことはよかった。攻防に於て、チームの組織力を生かすため誰がチームの組立をするかしっかりミーテングをやってほしい。試合運びについてもいろいろあるが、ペースをもっと考えるべきだ。そして試合に対して相手を知り、味方を知って策戦を立てねばならない。

○……女子は総合力の日体大が自信とキャリアにものをいわせ、優勝し対学生69連勝を達成したのは立派であった。日体大、東京女子体大、中京大の実力の差は少なく特に東京女子体大が後半、日体に2点中京大に5点もリードしながら勝利をつかめなかったのはベンチも選手も勝つことを知らなさすぎる。しかし、よき経験になったであろう。今後大いに楽しみのチームである。

中京大も勝つ執念は旺盛であったが、気持だけが先走ってプレーがついていかなかった。女子も技術向上はしたといえ、まだまだで実業団の上位チームに早く接近してほしい。

○……ところで、今年度から、改正された競技規則のうち「コートのサイド巾20m」と「女子25分ハーフ」の二重大点が、各チームとも未消化であったのは残念なことである。

サイドラインの短縮は戦法的にも大きな影響があり、どのような策戦、攻防が見られるか期待をかけていたのだが空しかった。球界のトップゾーンを自負する学生界であれば、つねに新しいことを心がけ、旺盛な研究心をこうした機会に示し、実らすべきではないか。

また、女子がハーフ5分の延長を実施しながら、スタミナの養成が充分でないのも残念なことである。この5分を活用することによって試合の様相は一変するのだし、それが勝機を得ることにもつながる。〝新しいこと〟に消極的では、トップレベルから、取り残されるばかりであることを、自覚して欲しい。（大会審判員）

（注）試合記録は先号既報

男子 下関中央工、女子 菊池農に初の栄冠

～第19回全日本高校選手権～

明星（男・東京）の3連覇成らず

第19回全日本高校選手権は、7月28日、広島県甘日市町の甘日市高で行われた開会式で幕をあけ、29日から8月3日までの6日間、全国47地区千余校によるはげしい予選を勝ち抜いた男子51校、女子50校によって争われた。

大会前半は風雨にみまわれ、一部の試合を広島大体育館に移すなど各校とも悪戦苦斗となったが、後半は、炎天下に若い力をぶつけあうインターハイ特有の熱気につつまれた試合がつづき、〝世界〟をめざす日本ハンドボール界のたくましい息吹きを感じさせた。その結果、男子は、準決勝で3連覇をめざす明星（東京・推せん）を降した下関中央工（山口）が決勝戦で中央大附属（東京）を接戦の末に降し初優勝した。女子は、有力チームが次々と敗退する波乱の展開となり九州1位・菊池農（熊本）――四国1位・新居浜市商（愛媛）の西日本同士の決勝から地力にまさる菊池農が制勝、初の栄冠を握った。

なお、男子優勝の下関中央工は第1回日韓高校総合体育大会の日本代表として8月12日訪韓、ソウルで韓国チームと2試合を行った。

男子

▽1回戦

仙台二（宮城）19（8―4、11―3）7 境（鳥取）

緒戦とあって固さが目立ち、どちらも優位になかなか立てなかったが〝走り〟にまさる仙台二が前半のリードを守って押し切った。ディフェンスの研究が両校とも必要だ。

添上（奈良）12（4―3、8―3）6 桜台（愛知）

前半は〝貧打戦〟で勝負は後半にかけられたが、添上は10分7―4とリードして主導権を握り、いちどは2点差に詰められたが、終盤連続4ゴールしてダメを押した。

名門桜台が全国大会の1回戦で敗れたのは初めてだが、この試合攻守ともに添上の力が一枚上だった。

塩山商（山梨）11（6―2、5―6）8 石川県工（石川）

前半は塩山のペース。後半に入って石川はゴール前のこまかい動きからチャンスをつかみ21分には8―9としたが、塩山はそのあと2ゴールを加え振り切った。

小倉工（福岡）13（7―4、6―4）8 四日市商（三重）

実力は互角。わずかに小倉工が大島―古森のコンビを軸とした攻撃力に優り、勝ちを握った。四日市商は俊足の木村をもう少し巧く使えれば勝機もあったと思う。

国学院栃木（栃木）14（7―5、7―4）9 鰺ヶ沢（青森）

同型のチームだったが、国学院は前半20分4―5の劣勢から佐久間の活躍で逆転してからマイペースとなり、後半も着実に加点した。鰺ヶ沢は後半7分から約10分無得点だったのが痛い。

東根工（山形）14（9―6、5―3）9 富岡（群馬）

富岡の先行で進められたが、東根工は前半18分6―6に追いついてから逆に試合のペースを握り、後半12分12―6と開いて、オールコートアタックなど懸命な反撃を示す富岡をおさえた。

神代（東京）12（8―4、4―6）10 羽水（福井）

後半3分4―9と開かれた後の羽水の反撃はみごとで12分同点となり湧かせたが、神代は19分、21分（7MT）の2点で辛勝した。羽水は前半、神代のエース吉野をマークしきれなかったのがひびいた。

下関中央工（山口）16（8―4、8―5）9 清水商（静岡）

好勝負が期待されたが下関は前半15分3―4とリードされたあと一気に5点を奪い優位に立ち、この快攻が勝利に実った。清水はポストプレーにこだわりすぎた。

三原工（広島）19（7―6、12―7）13 加治木工（鹿児島）

三原は後半、加治木の攻撃の芽を巧い守りでつみとり、攻めては鮮やかな速攻でポイントをあげた。

加治木は個人技にたよりすぎでもう少しチームプレーが欲しい。

年次優勝校

	【男子】	【女子】
昭25	足利（栃木）	操山（岡山）
昭26	桜台（愛知）	青陵（岡山）
昭27	桐生工（群馬）	寝屋川（大阪）
昭28	桜台	稲沢（愛知）
昭29	桜台	寝屋川
昭30	桜台	明善（福岡）
昭31	桜台	寝屋川
昭32	桜台	水海道二（茨城）
昭33	清水商（静岡）	寝屋川・熊本市立
昭34	中京商（愛知）	熊本市立
昭35	中京商	熊本市立
昭36	中京商	半田（愛知）
昭37	桜台	静岡城北
昭38	桜台	静岡城北
昭39	明星（東京）	栃木女
昭40	桜台	静岡城北
昭41	明星	和洋女（秋田）
昭42	明星	花巻南（岩手）
昭43	下関中央工（山口）	菊池農（熊本）

佐野工（大阪）24（14−1，10−3）4 城北（徳島）

佐野工が秀れた試合展開力を見せ、前半なかばで大勢を決した。

聖光学院工（福島）24（10−3，14−1）4 都城泉ケ丘（宮崎）

聖光は鋭いタテの切りこみで、都城の守りを崩し、全員がムラのない攻撃力をみせ快勝した。

新居浜工（愛媛）20（10−4，10−5）9 倉敷商（岡山）

新居浜工は巧みなフォロープレーをおりまぜた攻撃でいったんペースを握ると波に乗った展開をみせ圧倒した。倉敷は前半12分4−3といちどはリードしたが、総合力で一歩をゆずった。

堺　工（大阪）15（7−3，8−3）6 相模台工（神奈川）

スタートは互角だったが、次第に堺工の地力が発揮されはじめ、最後は大差になった。

相模台工は、こまかいミスが目立ち、そこをつけこまれたのが敗因。

中　京（愛知）18（11−4，7−5）9 柏崎工（新潟）

中京は、前半、相手のシュートミスに乗じて矢次早に加点、柏崎の機先を制した。柏崎は、後半開始後の反撃でわずかに気勢をあげたにとどまった。

上　田（長野）7（3−4，4−1）5 加納（岐阜）

リードされた上田は後半、数少ないチャンスを着実にモノにして逆転勝ちした。両校とも消極戦法で、まったく活気のない試合に終始した。

大　曲（秋田）15（10−3，5−6）9 那賀（和歌山）

実力に差はないと思われたが、前半、新田を軸とした大曲がうまく得点したのに対し、那賀はまったく乱調で、この巧拙が最後までゲームを支配した。

麻　生（茨城）26（10−2，16−4）6 鶴崎工（大分）

鶴崎は麻生の速い動きを封ずることができず、その猛攻をあびて完敗だった。麻生は全員秀れたシュート力を持ち、守りの面でもスキがなかった。

函館東（北海道）15（7−5，8−8）13 高知西（高知）

終盤の高知の反撃で盛りあがったが、函館は、前半のリード点を固く守って逃げ切った。両校とも に単調なセットプレーのくり返しだったがもう一歩工夫が必要。

熊本市商（熊本）17（8−3，9−4）7 盛岡高（岩手）

熊本は、前半10分6−0とリードしたが、これは盛岡の横走りからのパスをカットしては速攻に結びつけたものだ。

盛岡は、焦りもあって、熊本のディフェンスをくずせず、よいところがなかった。

神代、下関中央工に惜敗
松江工、函館東を破る

▽2回戦

明　星（前年優勝・東京）10（7−3，3−1）4 仙台二

3連勝を狙う明星はさすがに基本技がしっかりしており、グランド条件（降雨）の悪さをほとんど気にせぬ攻防を示した。仙台の消極策はうなづけない。

添　上 8（3−0，5−5）5 坂出工（香川）

パスワークにまさる添上が前半リードをうばい、後半五分の戦況をのり切った。雨中戦で両校とも存分に力を揮えなかったのは気の毒で、特に前半の坂出工にそれがいえた。

塩山商 18（10−2，8−6）8 小倉工

速攻とセットプレーを巧みに使いわけた塩山商が、前半一方的に攻め勝ち、後半の小倉の反撃をおさえた。小倉は体格差のハンデもひびいていた。

横浜南（神奈川）11（7−1，4−5）6 国学院栃木

横浜は、国学院のミスをついて前半大きくリード。後半国学院も必死に追いあげたが空しかった。

この気力が前半に出ていれば勝機も得られたろう。

東根工 7（3−2，4−0）2 佐原（千葉）

後半、東根はゴール前でよく動き、右45度から確実なシュートを放って加点。逆に佐原にゴール前の走りをとめられた上、シュートも単調で、追いつくべき後半に零封されてしまった。

下関中央工 9（4−1，4−7…0−0，1−0）8 神代

大会初の延長となったが、下関は延長後半2分吉田のゲットが勝利点となった。下関はポストからチャンスをうかがうが、雨のため細工ができず、一方の神代も、相手のミスから追いこみながら、リードすることができなかった。特に、前半は8分の1点だけという凡攻に終ったのは、悪条件とはいえ、あまりにも不出来だった。

ともに、技倆伯仲の好チームで晴天下ならば、さぞかし、スピーディな好試合を展じ得たであろうにと、かえすがえすも天候不順が悔やまれる。

三原工 13（6−6，7−5）11 洛星（京都）

好ゲーム。三原工の勝因は後半10分9−8から2点を加えた積極策にあった。このあといちどは11−11とタイにされたが23分、24分にゲットして勝ちを得たのも、いったんのリードに逃げに廻らなかったのが遠因だ。洛星も好チームだがポストに対する守りにもろさがあった。

佐野工 12（8−3，4−6）9 小杉（富山）

小杉は前半、ツメが甘くシュートが単調になり逸機したのが最後までたたった。佐野工はソツのない攻防で追われながらも余裕があった。小杉の善戦を賞したい。

中大附属（東京）23（11−8，12−8）16 聖光学院工

中大のペースで進んだが、聖光もよく粘り面白い試合になった。両校ともセットプレーにあと一歩の研究を望みたい。

新居浜工 24（10−3，14−1）4 口加（長崎）

新居浜工は、口加の一線防禦を中央からつく豪快な攻撃をみせ一方的な経過で押しまくった。

堺　工 17（10−5，7−3）8 浦和市立（埼玉）

立ちあがり不調の堺工は10分すぎから攻撃のテンポが整い、中村大谷の巧技であっさり試合の主導権を奪いとり、後半も要所を逃さぬ攻撃で、食い下る浦和を降した。

中　京 20（11−8，9−5）13 八幡工（滋賀）

ともによい出来ではなかったが地力にまさる中京が中盤にガッチリと守りを固めて八幡を封じこみ制勝した。八幡工は得点に波があり、安定度で中京に一歩ゆずった。

滝　川（兵庫）12（5−3，7−7）10 上田

滝川はゴール前のFTをよく活かして得点、粘る上田をふりはなした。雨中戦の経験が乏しいだけに動きに欠けた試合で、特に上田

は得意のセットが実らず苦しんでいた。

大　曲 12（4−3、8−2）5 麻　生

雨のため、まったく攻撃のテンポが整わず、わずかに大曲が、FTから得点機を見出して加点、勝ちをつかんだ。麻生はポストプレーにこだわりすぎた感じである。

松江工（島根）7（4−2、3−4）6 函館東

四度び同点の6−6から松江は24分青砥が貴重なゲット。逃げ切った。同じタイプだけに、決め手の封じあいとなり、予断を許さぬ緊迫した一戦だった。

熊本市商 9（3−3、4−4、1−0、1−1）8 広（広島）

昨年の準優勝校・広が敗れた。前半0−3とリードされた広は10分以後相手の攻撃をおさえる一方反撃してタイ。勝負は後半に入り一進一退から23分広は大下のゴールで7−6とし勝ちを決めたかにみえたが、熊本は24分田上が同点ゲットして延長をなり、たがいに1点づつあげたあと延長後半タイムアップ寸前、熊本は古沢が劇的なゴールを奪って辛勝した。

6回も同点となる展開だったがともに荒さが目立ち、好内容とはいえなかった。

中大附、新居浜工に辛勝
滝川、中京らベスト8に

▽3回戦

明　星 9（6−2、3−4）6 添　上

添上ディフェンスは前半、明星の速い動きにつけず、15分5−0と開かれる拙い立ちあがりとなった。後半、明星は佐々木がマークされ苦戦となり、1点差まで詰められたが、終盤2点を加え逃げ切った。添上は序盤の乱れが惜しまれる。

塩山商 13（6−2、7−2）4 横浜南

横浜はゴール前の横パスが多く攻撃がからまわりしているスキを塩山につかれた。

塩山は、つかんだチャンスを秋山、深沢、川崎らを中心に着実に活かし、特に後半10分間に5点を連取した攻撃ぶりは鮮やかだった。

下関中央工 9（3−2、6−3）5 東根工

有利とみられた下関は、悪コンディションのためボールが手につかず東根の食い下りを許した。

後半になってようやく本来の調子をとりもどし15分8−2と開いて大勢を決めた。東根はドリブル攻撃が多くパス攻法をもう少し身につけて欲しい。

三原工 13（5−7、8−5）12 佐野工

佐野は馬野、辻野らのシュート力を活かしたパスプレーで前半リードしたが、三原は後半、固いマークで、相手の攻撃を封じるとともに着々と得点を返して20分10−10。さらに12−10と開いたあと粘る佐野に23分12−12と追いつかれたが、24分角田が決勝シュートを決めた。

中大附属 12（6−4、6−7）11 新居浜工

新居浜は藤田の個人技で前半は食い下った。中大はゴール前で巾広い動きを見せたが好調といえず、特にディフェンスは終盤疲れが見えて新居浜の反撃を許したが、危うく逃げ切った。

中　京 15（10−4、5−4）8 堺　工

中京は梶村のシャープな動きから得点機をつかみ前半大きくリード、優位に立った。堺も左腕・中村のシュート力を軸に対抗したがチームとしての動きは中京が一枚上で、中京の雨中でも乱れぬ試合ぶりは基本の確かさを示すものだ。

滝　川 14（6−1、8−6）7 大　曲

滝川は左サイドからの攻撃を中心に好機をつかんだ。大曲は新田の長身を活かした攻撃で対抗したが滝川のマークに会いシュートがそれた。後半は一進一退だったが滝川前半の優位は動かなかった。

熊本市商 14（7−2、7−0）2 松江工

松江工は小粒ながら、全員がよく動き走力あるチームだが、熊本の防御陣がそれを上廻る動きをみせたため得点をあげられなかった。熊本は坂本建の好リードから巧みなオープン攻撃で多彩なシュートを決め会心の勝利をおさめた。

東京勢2校、準決勝へ進む
下関中央工、熊市商も勝つ

▽準々決勝

明　星 12（6−2、6−5）7 塩山商

【塩山】	得		【明星】	得
佐藤	0	GK	武井	0
三枝	0	GK	清水	0
深沢	3	FP	佐々木	3
鶴田	1	FP	上平	3
広瀬	0	FP	吉岡	2
早川	0	FP	千葉	0
川崎	2	FP	小根	2
秋山	1	FP	宮沢	1
萩原	0	FP	川口	1
田辺	0	FP	荒井	0
新谷	0	FP	小川	0
	7	（3）7MT（0）		12

（主審 上田）

明星が多彩な攻撃を展開したのに対し、塩山は連戦の疲れか、走りが充分でなく、パスのフォローがなかったためカットをされることが多かった。明星は全員がさすがに洗れんされたプレーを見せ、特に塩山の得点源・川崎をマークした守りは巧かった。

下関中央工 13（5−4、8−2）6 三原工

立ち上がり下関は元気がなく、14分1−4と離された。しかし前半20分あたりから調子をとりもどして逆転、後半はその好調を守って次第に点差を開いた。

【下関】	得		【三原】	得
山徳	0	GK	桑田	0
西村	0	GK	高橋	0
広井	2	FP	東野	3
今浦	1	FP	林	1
古田	2	FP	渋谷	0
中川	3	FP	八塚	1
酒井	1	FP	角田	0
川谷	2	FP	池田	0
古谷	2	FP	鈴木	0
鬼村	0	FP	近見	1
西島	0	FP	陰迫	0
	13	（3）7MT（3）		6

（主審 岡前）

三原はせっかく機先を制しながら要所で得た7MTやノーマークシュートを失敗したのが痛い。

中大附属 16（8−5、8−5）10 中　京

【中京】	得		【中央】	得
沓名	0	GK	吉岡	0
福井	0	GK	吉近	0
幸	3	FP	岸田	1
山本	3	FP	鈴木	2
小川	0	FP	今関	3
丹羽	2	FP	渡辺	3
山川	0	FP	花輪	4
梶村	2	FP	塚田	2
三浦	0	FP	古畑	1
中島	0	FP	佐野	0
村田	0	FP	上村	0
	10	（1）7MT（1）		16

（主審 村田）

中大は序盤に得意の速攻から4点を連取、しかし中京もすぐ反撃して15分4−4。このあと中京はGK（福井）の反則退場で動揺したか4点を失い、中大を楽にさせた。

中京は後半よく粘り21分10−11とし興味を盛りあげたが、中大はそのあと連続5ゴールして振り切った。

熊本市商 18（10−4、8−10）14 滝　川

【滝川】		得
GK	伊藤	0
GK	吉川	0
FP	松岡	10
FP	本木	0
FP	白井	0
FP	川口	0
FP	村田	0
FP	植田	0
FP	吉村	1
FP	有本	2
FP	喬	1

（主審 金原）

【熊本】		得
GK	柳川	0
GK	池田	0
FP	竹下	8
FP	田上	3
FP	古沢	2
FP	坂本建	2
FP	吉本	3
FP	野田	0
FP	宮本	0
FP	坂本正	0
FP	北村	0

18（3）7MT（4）14

熊本はダブルポストから竹下らのロングシュートで得点を重ね前半大差をつけた。リードされた滝川は後半松岡の活躍で懸命においあげたが、前半のミスがたたり勝負をかえるまでにはいたらなかった。

下関、明星の野望阻む
中大附は熊本市商に快勝

▽準決勝

下関中央工 13（3－2, 10－7）9 明星

【明星】		得
GK	武井	0
GK	清水	0
FP	佐々木	4
FP	上平	4
FP	吉岡	0
FP	千葉	0
FP	山根	0
FP	宮沢	1
FP	川口	0
FP	荒井	0
FP	小川	0

（主審 中西）

【下関】		得
GK	山徳	0
GK	西村	0
FP	広井	1
FP	今浦	1
FP	吉田	1
FP	中川	8
FP	酒井	1
FP	川谷	1
FP	古谷	0
FP	鬼村	0
FP	西島	0

13（5）7MT（1）9

前半、両校とも消極的な攻めあいが続き2－2から8分下関は広井のゲットでリードした。明星は下関GK山徳の好守に阻まれチャンスを失したのがひびいていた。後半、下関は中川を軸にコンビのとれたセットから巧みなポストプレーを生み、また、4本の7MTを中川が的確に決めて、着実にポイントした。

明星も、早いボール廻しから佐々木、上平のゴールで反撃したが、先手をとられた焦りもあって及ばなかった。しかし、2連勝の偉業をとげた名門の面目を保つに充分な試合ぶりといえよう。

中大附属 17（9－3, 8－2）5 熊本市商

【中央】		得
GK	吉岡	0
GK	吉近	0
FP	岸田	0
FP	鈴木	3
FP	今関	1
FP	渡辺	6
FP	花輪	5
FP	塚田	0
FP	古畑	0
FP	佐野	0
FP	上村	1

（主審 村田）

【熊本】		得
GK	柳川	0
GK	池田	0
FP	竹下	1
FP	田上	1
FP	古沢	2
FP	坂本	0
FP	吉本	1
FP	野田	0
FP	宮本	0
FP	坂本	0
FP	北村	0

5（1）7MT（3）17

中大の攻撃は〝爆発〟的だ。この試合も4－3から5点連取して9－3。後半も最初の15分間はわずか2点だが、その後の10分間に6点をもぎとっている。

熊本は序盤では持ち味を活かして善戦したが、わずかなスキを一気におそいこんでくる中大の迫力に圧倒されてしまい、その後は散発的に得点をあげたにとどまった。

中大附の反撃及ばず

▽決勝

下関中央工 17（7－6, 10－8）14 中大附属

【中央】		得
GK	吉岡	0
FP	岸田	0
FP	鈴木	0
FP	今関	2
FP	渡辺	3
FP	花輪	4
FP	塚田	5

（主審 村田）

【下関】		得
GK	山徳	0
FP	広井	5
FP	今浦	3
FP	吉田	0
FP	中川	7
FP	酒井	1
FP	川谷	1
FP	古谷	0

17（4）7MT（0）14

巧みなポストプレーを特色とする下関は、リーチのある中大のディフェンスにいかに切りこみを掛けるか、一方の中大はミスのない速攻でどれだけ試合を終始できるかに期待がかけられた。

試合は予想どおり、決勝戦にふさわしい攻防展開で始まった。

中大は花輪が2分に先取点をあげたものの、その後は下関のマン・ツウ・マンディフェンスに苦しんだ。しかし下関の攻撃力が整わぬスキをついて渡辺、塚田らのゲットで5－3とリード。これに対し下関は一向に動揺せずゆっくりと調子を整わせポストプレーと中川の好判断からじっくりポイントをあげ、22分逆に優位に立った。

後半に入って下関は中川、広井、中大は花輪、塚田らがシュートを決めて白熱した。

特に15分12－8の劣勢からの中大の反撃は鋭く次第に点差をつめ息ずまる緊張のあと、ついに21分今関のゲットで14－14となった。

しかし、それまでつねに先手をとっていた余裕があり、22分今浦23分広井、24分中川と加点して最後の5分間で決定的な差をつける地力を示し、初優勝を飾った。

下関中央工の勝因は、全員ムラのない攻守と日を追って調子をあげた尻あがりの試合ぶりにあったが、特に主将・中川のオールラウンドの巧技は目立ち、優勝の原動力として賞讃したい。

女子

▽1回戦

名古屋女商（愛知）9（6－4, 3－3）7 涌谷（宮城）

互いにディフェンスの当りが強くそれを押し切る攻撃の決め手に欠けたが後半14分7－7から名女商は15分、19分にゴールをあげて逃げこんだ。

両校とも速攻を今一歩研究して欲しい。

明善（福岡）6（5－0, 1－2）2 小平（東京）

明善は脚力を活かして前半で〝安全圏〟に入ったが、後半は小平の頑張りにあってまったくよいところがなかった。小平の後半の出来が、前半に出ていれば試合はもつれたろう。

加治木（鹿児島）6（3－4, 3－1）5 八幡商（滋賀）

よく似たタイプだったが、前半劣勢の加治木は、後半あざやかなサイド攻撃で逆転勝ちした。

八幡は惜しい星を落としたがシュート力強化が今後の課題。

柏崎常盤（新潟）7（4－2, 3－4）6 昭和学院（千葉）

延長必至かと思われたが、柏崎がタイアップ5秒前永井のゴールで決勝点をあげた。柏崎のコンビ攻撃、昭和のサイド攻法と特色を活かしあった好試合だった。

松江市女（島根）6（2－2, 4－3）5 高知西（高知）

松江はサイドから数少いチャンスをつかんで優位に立っ。高知西は、後半15分間無得点の貧攻がたたり、残り5分間に3点をあげる粘りも実らなかった。

高岡女（富山）7（5－2, 2－2）4 広島一女商（広島）

体力にめぐまれた高岡はスピード、シュート力とも広島を上廻り順当な結果といえた。反則が多いのは感心できない。広島は攻撃が単調すぎ、変化に乏しかった。

玖珠農（大分）8（1－2, 5－4 …… 2－0, 0－0）6 高志（福井）

押し気味の玖珠農は延長前半に佐藤、江藤の連続得点で粘る高志を降した。高志のスローテンポの展開はシュート力がともなえば、効果を増そう。

高崎市女（群馬）11（7－1, 4－3）4 竹田女商（山形）

高崎のゴール前でのスピーディな攻撃が前半効を奏し主導権を握った。両チームともディフェンス

技術が拙く、もう一工夫が望まれる。

平塚江南（神奈川） 8（4—0／4—2）2 十津川（奈良）

江南のまとまりあるプレーに対し、十津川は基本的でも見劣りがし、それがそのままスコアになって表れた。

小松市女（石川） 11（6—2／5—1）3 三本松（香川）

三本松は走り負けた。小松は森の好プレーを中心にスピーディな攻撃を見せたが、シュートそのものは単調だった。脚力があるだけにこれは惜しい。

加　納（岐阜） 8（5—0／3—2）2 神埼農（佐賀）

加納は平野、宮本のシュート力を活かして前半でペースを握った。

神崎農もまとまりのある好チームだがシュートに的確さを欠いたため自滅した。

真　備（岡山） 17（7—2／10—3）5 都城泉ケ丘（宮崎）

体力にまさる真備がみごとな攻撃をみせ、特に中本、新井らのポストは鮮やかだった。都城は後半わずかに気勢をあげたが、最後は大差をつけられた。

水海道二（茨城） 6（3—3／3—1）4 甲子園学院（兵庫）

試合展開の巧拙が勝負になった後半、水海道はポストプレーを巧みに活かし、7MTを誘ってリードした。両校とも体力にまかせた荒い守りは感心できない。

和洋女（秋田） 16（8—0／8—0）0 小禄（沖縄）

力の差がはっきり出てしまった和洋が攻守に会心の出来を示しては、長峯を軸に一矢を報いようとする小禄も斗志だけがカラ廻りしてしまった。

菊池農（熊本） 10（3—3／7—2）5 小諸商（長野）

小諸の善戦が光った。しかし後半になると、菊池の秀れた脚力に小諸ディフェンスが突破されはじめ、そのオーソドックスな攻撃を受け切れなくなってしまった。

徳　山（山口） 10（9—5／1—2）7 勝浦園芸（徳島）

徳山は前半、岡田の個人技で主導権を握ったが、後半は低調な試合運びで凡戦だった。

勝浦はコンディションの悪さに力を存分にふるえなかった感じである。

栃木女（栃木） 10（4—1／6—1）2 大谷（大阪）

得点差は開いたが大谷は最後までよく走りチャンスをうかがっていたプレーは好感がもてた。

栃木は速攻がまとまり、FTもよく決まっていた。

淑　徳（愛知） 10（6—4／4—4）8 岩手女（岩手）

2点を追う岩手は後半15分8—8のタイに追いついたが、淑徳は16分松原、18分小原のゲットで逃げ切った。ともにソツのない攻守を示し、屈指の好ゲームであった。

花巻南（前年優勝） 早くも敗る

小高農、水海道二を降す

▽2回戦

名古屋女商 7（4—2／3—0）2 花巻南（前年優勝・岩手）

雨中戦だったがキビキビと動きあい、テンポの早い好試合。後半名女商は、巧妙なリターンパスプレーで加点、前年優勝校を破る殊勲をあげた。花巻南は攻守ともに凡調で実力以下の試合ぶりだった。

明　善 8（4—1／4—0）1 四日市（三重）

明善は守りをやや高目にして四日市の切りこみを最後まで許さなかった。

攻めても、走りから相手の守りをさげ、そこをロングシュートでついていた。

加治木 6（3—0／3—0）0 柏崎常盤

柏崎のロングシュートが決まらず、逆に加治木の攻撃をうけた。

この試合に限らず、各校とも晴天時のみはなく雨中戦の展開（プレー）について研究すべきではないか。

深谷女（埼玉） 5（2—2／3—2）4 松江市女

2—3とリードされた深谷は7MTでタイとしたあと連続ゴールして逆転、押し勝った。松江の力も劣らず、もう少し試合運びを覚えればさらに好チームとなろう。

清水商（静岡） 6（3—0／3—2）2 高岡女

高岡はゴール前での動きが少くシュートも弱かった。一方の清水商は終始積極的に攻め、小柄ながらスケールの大きい試合ぶりを見せた。

玖珠農 7（2—1／5—0）1 住吉学園（大阪）

勝負をかけた後半、玖珠農はショートパスで相手ディフェンスをゆさぶり着々ポイントした。住吉は粘りにかけ、チャンスをつかんでも相手GKの美技に阻まれ、後半は完敗だった。

高崎市女 7（4—2／3—1）3 佐世保商

佐世保が好機を反則やパスミスでつぶしたのに対し、高崎はフォロープレーやロングシュートなど多彩な攻めで加点、制勝した。

新居浜商（愛媛） 3（1—2／2—0）2 平塚江南

ともにまとまりのある好チームだがコンディションの悪さもあって迫力にかけた。リードされた新居浜は後半10分すぎまとめて2点をあげ、守っては江南を零封、辛勝した。

山陽女（広島） 8（4—1／4—1）2 小松市女

優勝候補・山陽の順当勝ち。試

合展開力の巧さに勝因があった。

小松はセットから攻撃機を見出していたが無理なシュートが多くかえって山陽の逆襲をうけた。

佼成学園（東京） 6（4—3、2—2）5 加納

ともにパスミスが多く、雨とはいえキャッチも拙かった。どちらが勝っても不思議はない伯仲の経過だったが佼成後半18分のゲット（岡野）が決勝点になった。

明徳商（京都） 3（2—1、1—1）2 真備

明徳は滝本のフェイントを軸にチャンスをつかんだかなり巾の広い攻撃を示した。真備は、中本にたよりすぎていたようで、もう少し積極的に攻めてみたらさらにもつれたろう。

小高農（福島） 10（5—4、5—5）9 水海道二（茨城）

小高が先手をつかんで試合は進み、粘る水海道は後半15分9—9にやっと追いついた。小高は17分池沼が貴重なリード点を奪い、そのあとの水海道の反撃をおさえて逃げ切った。水海道はディフェンスの甘さが敗因。好内容のゲームだった。

和洋女 3（0—1、3—0）1 山梨（山梨）

結果が示すようにともに不安定な戦いぶり。山梨は立ちあがり2分前田のゲット以後ノーゴールという貧攻。勝った和洋も後半10分まで0点という拙さで、わずかに和洋のまとまりに分があった。

菊池農 13（5—1、8—3）4 徳山

菊池は後半メンバーを入れ替える余裕さえ示す圧倒的強さだった。

徳山は、まとまりのあるプレーがみられず、押しまくられた。

栃木女 13（6—2、7—1）3 粉河（和歌山）

栃木は守りが固い。その壁を破るために粉河は疲れてしまったようで、攻めに廻ってもいっこうに冴えがなかった。栃木は攻めても全員がシャープな力を示していた。

室蘭商（北海道） 5（1—2、4—2）4 淑徳

室蘭は、ゴール前でボールが廻らず苦戦したが、後半持ちまえの地力を示して危うい勝ち星を握った。

淑徳は自己のペースで押しながら、後半のチャンスを相手GKの好守におさえられたのがひびいた。

室蘭商、和洋、明善ら敗退

菊池農、抜群の攻撃力示す

▽3回戦

名古屋女商 7（2—2、5—1）3 明善

2—2から名女商は後半開始と同時に浜島、伊藤らのゲットで一気に5点を奪い大勢を決めてしまった。

明善も、よく攻めていたが肝心のシュートに的確さがなく、結局は〃攻め〃の差が表れた。

深谷女 7（4—2、3—3）5 加治木

深谷のスピード豊かなパスワークに加治木につききれず、攻めてもタテへの切りこみに乏しかった。

後半、追いこんだものの、深谷は余裕があり、加治木は15分5—6までしたのが精いっぱいであった。

清水商 17（10—2、7—6）8 玖珠農

負傷者が続出するラフな展開となったが、攻撃力にまさる清水商は、前半マイボールをほとんど得点に結びつける好調な試合ぶりだった。

玖珠農はひるまず後半佐藤を中心に反撃したが大勢はかわらなかった。

新居浜商 13（7—2、6—3）5 高崎市女

新居浜は全員がよく走り、前半で勝負は決まったも同然だった。

特に山本のシャープなプレーは光った。高崎は速攻が早目々々につぶされ、セットプレーも相手の強い当りにあって実らず、消極的なプレーに終始してしまった。

山陽女 8（3—1、5—2）3 佼成学園

山陽は脚力を活かした速攻を武器に、佼成は湯浅を軸に遅攻で対戦。山陽は得意のゴール前の速い動きで佼成のデイフェンスをかき乱し快勝、地元の声援に応えた。

点差は開いたが、ともに最後まで気力充実の勢戦だった。

小高農 6（5—2、1—2）4 明徳商

小高のガードが厚く明徳は得意の遅攻の不発に終はり、小高が堂々ベストエイト入りした。前半の小高は速攻から多彩なプレーを見せてゴールに結びつけたのは巧かった。両校ともポストプレーをマスターすれば、さらに力があがろう。

菊池農 18（10—2、8—4）6 秋田和洋

優勝争いに響くと期待された一戦も、和洋にミスが目立ち、そこを菊池につかれ、前半18分10—0と開いてしまう凡戦になった。それにしても菊池のスピード、タイミングのよいシュート、巾広い攻撃力は抜群である。

栃木女 9（3—2、6—1）3 室蘭商

栃木は相手の反則をうまく誘ってFTからチャンスをつかむ巧妙な攻撃をみせ、室蘭を自分のペースに引きずりこんだ。後半も個人技をミックスさせて主導権をはなさず、ほとんど室蘭につけいるスキを与えなかった。

東日本勢姿消す

新居浜商、清水商を破る

▽準々決勝

名古屋女商 8（5—1、3—5）6 深谷女

	【名商】	得		【深谷】	得
GK	高橋	0	GK	押野見	0
GK	村瀬	0	FP	味沢	1
FP	小島	2	FP	菊池	3
FP	中島	0	FP	腰塚	0
FP	藤田	0	FP	橋本	0
FP	磯村	2	FP	野本	0
FP	山内	0	FP	奥板	2
FP	岸	0	FP	桜木	0
FP	浜島	4	FP	青木	0
FP	伊藤	0			
FP	中山	0			

主審 岡村

8（2）7MT（0）6

ディフェンスは名女商が1・5深谷は2・4。それをどう攻めくずすかがポイントだったが、名女商は前半2—1から浜島のロングシュートで点差をつけ、後半はGKの好技で深谷の反撃の芽をつんだ。深谷は前半、名女商の守りを攻めあぐんだのがひびいた。

新居浜商 16（6—1、10—2）3 清水商

	【新商】	得		【清商】	得
GK	西条	0	GK	服部洋	0
GK	小原	0	GK	天野	0
FP	磯部	0	FP	服部恵	1
FP	田中	1	FP	内田	1
FP	大塚	0	FP	松永	0
FP	加藤	7	FP	片岡	1
FP	山本	7	FP	長谷川	0
FP	曽我部	0	FP	森下	0
FP	金村	1	FP	水野	0
FP	泉	0	FP	斎藤	0
FP	飯尾	0	FP	中村	0

主審 中西

16（0）7MT（0）3

新居浜は、機敏な動きを見せ、特にリバウンド、ルーズボールをほとんど得て、それを得点に結びつけた。14点をたたき出した加藤—山本のコンビは光る。

清水は主力の故障に加えて、新居浜の当りに押し負けよいとこが

なかった。

山陽女 15（8—4、7—2）6 小高農

	【小高】	得	【山陽】	得
GK	松本	0	三上	0
GK	岩崎	0	三宅	0
FP	杉(静)	1	笹川	2
FP	杉(和)	2	山本	0
FP	古佐原	1	本多	0
FP	池沼	2	小畑	4
FP	志賀	0	吉川	3
FP	谷沢	0	本地	4
FP	高野	0	牧野	2
FP	木幡	0	柴田	0
FP	西	0	藤本	0

（主審 山本）

15（1）7MT（2）6

速攻に秀れたモノを持つ山陽は本地のインターセプトからしばしばチャンスをつかんでは相手ゴールを割り、それにセットをおりまぜて小高の善戦を退けた。

小高は、カットプレーからの速攻以外に反撃の機をつかめず完敗であった。

菊池農 12（6—0、6—3）3 栃木女

	【栃木】	得	【菊池】	得
GK	羽金	0	松田	0
GK	麻生	0	中川	0
FP	飯笹	1	村中	1
FP	渡辺	0	村上	1
FP	牛久	1	蔵田	2
FP	川田	1	水上	0
FP	関口	0	田尻	3
FP	菅沼	0	剣	4
FP	高岡	0	鶴田	1
FP	落合	0	積上	0
FP	熊倉	0	原口	0

（主審 片山）

12（1）7MT（1）3

菊池農は強い。しかも日増しにたくましさを増している感じだ。この試合も後半10分で10—2の完勝ペース。栃木女も必死の食いさがりを見せたが、〝力の差〟はどうしようもなかった。菊池の勝因の一つにGK松田の美技がある。

新居浜商、決勝へ進出
菊池農、山陽女も降す

▽準決勝

新居浜商 7（3—1、4—1）2 名古屋女商

	【名商】	得	【新商】	得
GK	高橋	0	西条	0
GK	村瀬	0	小原	0
FP	小島	0	磯部	0
FP	中島	0	田中	1
FP	藤田	1	大塚	0
FP	磯村	0	加藤	2
FP	山内	0	山本	3
FP	岸	0	曽我部	0
FP	浜島	1	金村	1
FP	伊藤	0	泉	0
FP	中山	0	飯尾	0

（主審 佐野）

7（0）7MT（0）2

新居浜はポストプレーをまじえた多彩なオープン攻撃と速攻を特色として攻めたてた。

一方、名女商もサイドを巧くつかって反撃を試みたがシュートミスが重なり相手GKの判断のよいプレーもあって前後半とも最少得点にとどまった。

新居浜はこの日も加藤、山本の好コンビネーションがみられた。

菊池農 15（6—1、9—5）6 山陽女

	【山女】	得	【菊池】	得
GK	三上	0	松田	0
GK	三宅	0	中川	0
FP	笹川	0	村中	1
FP	山本	0	村上	0
FP	本多	0	蔵田	2
FP	小畑	1	水上	5
FP	吉川	1	田尻	0
FP	本地	4	剣	6
FP	牧野	0	鶴田	1
FP	平石	0	積上	0
FP	藤本	0	原口	0

（主審 勝）

15（0）7MT（0）6

菊池は正確なパスワークから多彩なコンビネーションプレーを展開。速攻、ポスト、FTからのシュートを水上、剣を中心に落ちついたプレーで確実にものにした。山陽は時おりくり出す速攻もフォローが遅いためにシュートに結びつけることが出来ず、後半開始後1—7から本地のロングシュートで反撃、5—7まで追いつめたがそのあとがつづかなかった。

〝力の差〟といえばそれまでだが、スピード、フットワーク、パスワーク、シュート力すべての面で〝超高校級〟の技と力を備えた菊池農の勝利は、「順当」以外のことばはあてはまらなかった。むろ大差をつけられたものの、地元の声援に応えた山陽女の善戦を賞してよいだろう。

新居浜商、前半の善戦空し

▽決勝戦

菊池農 8（3—2、5—1）3 新居浜商

	【新商】	得	【菊池】	得
GK	西条	0	松田	0
GK	小原	0	中川	0
FP	磯部	0	村中	0
FP	田中	0	村上	3
FP	大塚	0	蔵田	4
FP	加藤	0	水上	1
FP	山本	1	田尻	0
FP	曽我部	0	剣	0
FP	金村	2	鶴田	0
FP	泉	0	積上	0
FP	飯尾	0	原口	0

（主審 上田）

8（4）7MT（0）3

新居浜はセットプレーを巧く使って、30秒左サイドから金村がバウンスシュートを決め幸先よいスタートを切ったが、その後は菊池の厚いディフェンスをなかなか破れなかった。

菊池は4分蔵田でタイ、13分7MT（村上）で2—1とリード。そのあと新居浜も16分再び金村のゴールで追いついた。すぐ菊池は7MTを得て村上が決め、優位を保ったが苦しい経過だった。菊池がセットプレーの呼吸が会わず凡攻をくり返しているスキを新居浜がつけば面白かったのだが緊張のせいかパスミスカットインの失敗などあって好機を逸したのは惜しまれる。

後半、菊池は3分FTから村上がジャンプシュートを決め、5分には新居浜のミスから速攻して7MTを拾って5—2。さらに8分中央突破で6—2としようやくテンポのある攻撃をみせはじめた。

こうなると大勢は決まったようなもので、新居浜は13分山本が左45度のミドルシュートで1点を返したが、すぐ2点を失い、初優勝をかけあった両者の対決は、スピードにまさる菊池農の制するところとなった。

敗れた新居浜も、試合展開に若さがのぞかれたものの、一歩もひかぬ健斗で決勝戦を盛りあげたのは特筆されよう。

菊池農の勝因は、秀れた体力をベースにした多彩な攻撃もさることながらGK松田を主としたディフェンスのシャープなプレーは参加校中随一の強さを持っていた。

全日本高校優勝を遂げるまで……

菊池農監督 荒木時弥

部の創立は33年。熊本市立高のインターハイ優勝に刺戟されて部を作った。目標「全国制覇、それが何年かかろうとも」。

四年目の37年、幸運にも国体優勝を果した。次いで40年。41年と連続国体をものにした。しかし、インターハイ（八回出場）はどうしてもとれなかった。第一次3年計画の37年は決勝で静岡城北に敗け、第二次の40年には絶対勝てると自信を持っていたが、準決勝で再び静岡城北に延長で敗れた。

インターハイに勝つためには、絶対的な強さのチームを育てることが必要である。43年度を目標に41年から、第三次三年計画にはいった。一年生10名、2年4ヶ月後の望ましいチームを頭にえがき練習計画をたてた。相手チームがどんな攻撃をして来ても、それを抑えるチーム。相手がどんな防禦をしても、それを破れるチーム。

ハンドボールを今からはじめる10名に、それも僅か二年半で、出来るだろうか。そのためには、レギュラーチームの練習を犠牲にしても、10名の練習は行った。

その間学校は、統合など色々な事があったが、練習は欠かさなかった。

どんな忙しい時でも食事はとる。練習も食事と同じに考えれば、やれない筈はないと〝練習は生活だ〟と、学業以外は一切を犠牲にさして、練習にうちこませた。私も、選手と一緒の生活を多くするため学校の近くに転居した。そして〝43年には絶対に勝つ〟と内外に表明した。その事によって、自分自身を律し、選手にも、勝たねばならぬ、勝つのだ、の気力を求めた。41年からは、生活の中に練習があるのでなく、練習の中に生活がある様なものだった。練習が計画より遅れた時は30日連続の合宿もやった。そんな生活の中でも、学業成績を下げるな、模範生徒であれ、等全人的な要求もした。それに生徒はよく答えてくれ、成績はクラスで一位、三位、五位を占めた。2年4ヶ月、10名は一人も欠けなかった。期待したチームに近づいて来た。

ときおり、選手が、何の為に、何故、と練習に対する疑いにとりつかれ、意欲が薄れかけた時、大洋の新保、射場さんに、色々と話しを聞かされ、再び激しい意欲を焼やしてくれた。「絶対的な強さ」が出来たと思わなかったが、何とか優勝出来るのではとの見通しもついた。九州高校選手権での完勝と言えるゲーム展開で更に自信をもった。そしてインターハイ幸いにも全試合ダブルスコアーの得点差で勝てた。勝った!!選手の泣き出しそうな顔、「泣くな、あと国体だ、国体がすむ迄泣くな」。あと二ヶ月、更に「絶対的な強さ」を求めて練習をつづけて行きたい。

全国制覇の感激

菊池農主将 水上百合子

優勝！やはりなんといってもうれしい。一年入学当時から私達が三年の時は必ず勝ちたい、いや「勝つ」と自分に誓っていただけになおさらです。やけつくような炎天下、どろまみれになりながらやった練習も、凍りつくような風の中で割れた手に息をふきかけながらやった練習もインターハイ優勝の実感の前には楽しい思い出です。優勝することができたのは、先生と部員の気持ちの一致はもちろん学校あげての応援と家庭の暖かい理解があったからです。

現在の私達の生活は、学校と練習を中心に、生活の計画がなされています。皆、暇がほしいな、なんていっていますが、結構それが楽しいのかもしれません、練習のない日は、歯車がかみあわない様な気がしますから。あと残る国体優勝をなしとげるまで練習を中心とした生活は続きそうです。

男女とも地域差消える
～全日本高校選手権総評～

平田幸男

○……第1日から第4日までは台風4号の影響をうけて、荒天の中での競技が決行されたが、高体連のマークが示すごとく『力・技・明朗なる精神』のもと雨天にも屈せず好ゲームが展開されたことは同情と感激のほかはない。好コンディションの試合でなかったことは〝残念〟の一語につきる。地元役員のグランド整備が行きとどいていた点には敬意を表する。

○……各地選出選手の力斗には敬服したるも、特に男子の部では初優勝を飾った下関中央工（山口）は準決勝、決勝で強豪・明星、中大附属（ともに東京）に対し、日頃の根性を随所で発揮し、マイペースでコンビネーション攻撃と堅固な守備力を活かして一蹴した力は、ハンドボール競技の典型であったといえよう。一方、決勝で敗れた中央大附属は高校生にふされたわしいグランドマナーで勝ち進んだが、決勝戦でリズムに乗り切れなかった点は惜しまれる。

○……女子の部において、初優勝の栄冠を獲得した菊池農（熊本）はシュートカ、脚力、パス・キャッチと三拍子が揃い、終始、明確な判断を持続するなど百戦錬磨のチームといって過言ではない。

準優勝となった新居浜商（愛媛）の走力を充分に活かして決勝に進出した気力は見逃せない。今大会では、男女ともに地域差がなく、実力の接近が目立っていた。

技術面で自滅する単独プレーが前半に見られ、敗れ去ったチームもあったが、あくまでもチームプレーに徹し、基本技を忠実に遂行し、冷静な判断と反射的プレーができるべく、より一層の精進こそ、日本高校ハンドボール界の水準向上に役立つものと思われる。

○……いずれにしても、荒天の悪条件のもとで、迫力ある好ゲームを展開し、充実した内容ある大会とした各監督の御指導と、選手諸君のスポーツマンシップに心から感謝の意を表明するものである。

また、連日運営にあたっていただいた審判団、さらに裏面でコート整理、記録、救護、報道の活躍は勿論のこと、総合体育大会だけに宿泊、輸送でご苦労された地元実行委員会、終りに全校あげてご協力いただいた会場の廿日市高等学校に対して、深甚なる謝意を表するものである。（競技副委員長）

下関中央工高（全日本高校選手権優勝）

韓国遠征リポート

第1回日韓高校スポーツ大会開く

第1回日韓高校スポーツ大会は8月12日から15日までの4日間ソウル市においてハンドボール、陸上競技、バスケットボール、バレーボール、サッカー、バドミントン、軟式庭球の7競技が行われた。

ハンドボールの日韓交流は、昭和38年12月韓国高校選抜（男）が来日して以来4年半ぶりのもので8月広島で開かれた第19回全日本高校選手権に初優勝した下関中央工（山口）が日本代表として遠征、13日朝鮮大附属高、14日大倫高と奨忠体育館で2試合を行い1勝1敗の成績をあげた。

選手団は16日夜帰国したが、本誌では球界初の高校単独チームとして国外遠征を行なった下関中央工に、韓国遠征の印象と全日本高校選手権獲得の感想を寄せてもらい"特集"とした。

なお、第2回日韓高校スポーツ競技会は、来年、韓国代表団が訪日して開かれる予定。

▼第1戦

下関中央工 18（8−6 10−10）16 朝鮮大附属

▼第2戦

大倫 16（10−6 6−6）12 下関中央工

日韓高校総合体育大会に参加して

下関中央工校長　中村正樹

スポーツによって結ばれる国々の親善は清く美しいものであることを東京オリンピックの際に強く感銘したことであったが、今ここに現実として本校ハンドボールチームがインターハイで優勝し、晴れて日韓親善の日本選手団に加っての遠征同行することに決ったとき、ソウルでの勝負の成否もさることながら友邦訪問の使命を思うて任重きことと心を痛めたものである。

さて、金浦空港に出迎えられた韓国体育会役員の人々より、とりわけ韓国ハンドボール協会幹部の方々よりの心をこめての握手は気兼ねに想うた心を一気に明るく打ちほぐしてくれたことである。選手村の村長さんも上手な日本語で気安い挨拶をされて以来一層親しい気持で話してもらうことができた。

夕刻からの開会式で整列した両国選手は緊張のうちにも融和なムードを醸成していた。式後の役員招請の宴での交歓の情はこういうことにはじめての自分にとって真にほほえましい姿であった。

翌日第一試合の終った夕刻よりハンドボール協会の招請で選手ともども格別のもてなしをうけた席は友情最たるものとして感激一しおであった。同じ競技種目を愛好し精進する人々の国境をこえて特に隣邦としての仲よしムードは心暖まることしきりであった。

次いで、第二試合の終った日の親善の夜は絢爛たる古典舞踊など高校層あげての歓待には目の覚めるような演出には深く感激した。

ところで、ハンドボール試合は一勝一敗に終ったが、スポーツとしてはもちろん生活的にもいろいろの勉強になったことは選手にとっても何にも代えがたい終生の体験であったと思う。これを将来に生かすことが遠征団員の責務である。なお終始当選手たちがよきマナーを顕現することにつとめて好感を得られたことも嬉しいきわみであった。

彼の地において一番強く肌に感受したものは結局スポーツによせられている積極的な取り組みの気魄である。役員の熱意と選手村の運営などからみてじゆうぶんうなづけることであった。すなわち、列国に伍してスポーツの栄光を勝ち取ろうとする意欲の力強いものを感じたのである。と同時に、スポーツというものの良さを、その真価を今さらのように、一しょに過した五日間の選手村の合宿で感銘したことである。

おわりに、親善大会関係の各位に深甚なる謝意を表して拙稿をおわります。

遠征選手団名簿（ハンドボール）

▽役員

山田　計（日本協会常務理事・高体連ハンドボール部副部長）

中村正樹（下関中央工校長）

▽監督

槇　敏夫（下関中央工監督）

▽選手

中川敏治（下関中央工3年・主将）

広井憲司（〃　3年）

今浦　隆（〃　3年）

吉田純一（〃　3年）

川合春海（〃　3年）

山徳辰男（〃　2年）

酒井　進（〃　2年）

古谷信幸（〃　2年）

鬼村浩治（〃　2年）

西島　勝（〃　2年）

西村健治（〃　2年）

皆本義典（〃　2年）

中野英司（〃　1年）

（注）日本選手団の総数は7競技103人。団長は前田豊氏（体協理事、競技力向上委員長）

全日本高校優勝と韓国遠征

下関中央工 監督 槙 敏夫

永い年月でした。

優勝を夢見て、昭和二四年に部を創立、以来十九年県内の大会に出場しては破れ、何時も打ちひしがれて試合場を去り、今度こそ今度こそとそのたびに自分を励まし先輩諸君の残した多数の教訓をもとに今まで頑張ってきた甲斐であったとよろこんでいます。

好選手に恵まれ、誰からも愛され好かれるハンドボール部にと心掛け、考えながら練習し個性を伸ばし、チームプレーに徹底させたのが優勝の原動力であり、連日多くの応援で選手も心強く思い切りプレーでき、声援に応えられたのだと思っています。

今までの数多く苦しみや苦い経験が吹き飛んだ感じです。選手も補欠も応援団もよくやって呉れました。学校の暖かい心づくしにも感謝しています。

今後も"勝って兜の緒を締めて"よりよいチーム作りに努力して行きたいと念じています。さて、全日本高校選手権優勝を果したあと思いもかけぬ韓国遠征──それも初の日韓高校体育大会のハンドボール代表の栄誉を得たのですが、韓国チームのプレーについては試合数が少ないの適切ではないかも知れないが見たまま報告したいと思います。

まず優れているものは走力と持久力、五〇分をフルにプレーして疲れを知らないこと。パスやシュートはまだ劣るように思われた。バスケット式のフェントパス、少さな動きが多くサイドとポストからの攻撃が主でディフェンスもロングシュートに弱い、従ってフェントやサイドからの攻撃に対してはよい守りをしている、ルールが随分おくれていて選手もやりにくそうであった。総合してハンドボールとしての技術的なものには劣るが基礎体力は優れたものをもっている。

選手は勿論、審判員、チーム指導者はルールや技術について熱心に質問し、吸収に懸命で、体力にプラス技術と云うことになると将来楽観出来ない存在になるのではないかと思う。

すべてにたくましい成長

～韓国ハンドボール界の実情～

山田 計

第1回日韓高校競技会の役員として選手団に随行し、わずかの期間ではあったが、韓国ハンドボール界の実情を見聞することができた。その大要を報告しておきたい。

今回の親善試合は、ソウルの奨忠体育館で行われたが、フロアーが円形のため、コートが38ｍ×18ｍというせまさで、下関中央工チームは勝手がちがったようだ。

観客は七千人収容のところへ二試合とも約四千人が集まり、盛会だったといってよい。

韓国の実力は、日本とほとんど差がなく、特に体力的に秀れていることは、これまでの交流の経験でも判っていたが、さらに技術的な進歩が加わり、強力な実力をもっていた。ただし、ルールの面では、日本より3年ほど遅れているようで判定解釈はかなり食いちがった。

韓国関係者は、今回の交流再開を非常に喜んでおり来年さらに2年後、3年後と回をおって内容を充実させ、来年からは是非女子も加えるよう両国で努力しあうことを申し合わせて来た。

五輪構想も具体化

ところで、今回の交流によって韓国ハンドボール界が、海外の情勢に非常に積極的なことを感じた。

現在会長は金義衡氏、専務理事は洪淳泰氏、事務局長は劉彰熙氏がつとめているが、金会長は漢城女子高創立者として高名な人。洪専務理事は38年来日している。

指導面は、若手役員を積極的に登用しているようで動きも活溌だ。オフィスには、洪氏のほか専任の事務長を中心に競技部・会計・庶務の3パートがあり、競技部はさらに審判、技術、普及に3区分され、高校界のレベルアップに重点がおかれている。

ミュンヘン・オリンピックへの関心もなみならぬものがありすでに長期強化合宿のプランも出来あがっているようだ。

これはハンドボールに限らず各競技団体に対して体育会（日本の体協にあたる機関。社団法人）が強力な発言とバックアップをして行われるもので、選手村を設けて選手を集め交通費を含め一切の費用を体育会が負担するそうだ。

「ステート・アマチュア」的な色彩が濃くなっているといってよいだろう。

アジア連盟の結成を期待

韓国ハンドボール界が強く要望していることに「アジア連盟の早期結成」がある。

韓国役員は、アジア連盟結成の労を日本が採るべきだといっており、日本が具体案を示せばすぐにでも第1回の会議を開きたいというほど積極的である。

日本への関心も、高校界に限らず強く、特に大学の交流再開を切望され、できれば今年度日本が、来年度は韓国がそれぞれ招待しあえないかと頼まれて来た。

このほか日本協会の方針、大会の内容などについても各所でたずねられ、指導者の交流、交歓講習会の開催などの提案が出された。

高校界の交流が復活したことによって、日韓のきずなは再び強く太いものになったが、同時に韓国ハンドボール界がすべてに前向きな姿勢を示し、たくましい歩みをつづけている印象を深めた。（日本協会常務理事）

選手寄稿

全国優勝と韓国遠征

3年（主将）中川敏治

我々全国高校生スポーツマンにとって、最大の大会である全国大会。この日のために、我々は日曜祭日の休日もなく、練習一筋に励んできた。その結果全国制覇という夢にも、思えなかったものが実現したのだ。一人々の根性・技量というものをいかに調整し、発揮

するか、又これによって得られる「和」すなわち、チームワークというものが、どんなに大事なものか、これらが一団となって手中に納めた栄冠。あの笛の鳴った瞬間の感激・喜びというものは二度と味わうことは、出来ないだろう。
　そして数日後日韓高校親善試合のために、一路韓国へと向った。親善が目的であるこの大会、親善の方は達成されたと思う。
　だが大倫高との一戦、ミスが続出日本のルールとの差によって一段と苦しい運びとなり、ついに初黒星。この苦い経験、体験を基に今後一層努力し、精進してより以上のチームになりたい。

3年　広井憲司

　インターハイ初優勝の喜びは一言では表わす事の出来ないものである。チームワークがとりえだけの下関中央工が優勝できたのは一二年の夏休みの猛練習,日曜日、祭日も返上して練習した結果が全国優勝という偉業をなしとげたのだろうと思う。優勝した瞬間、うれしかった。日本一になったんだ。ただこれだけが頭の中に残っている。
　韓国では多いに歓迎してくれ、日本選手団のための催しまでしてくれてとても感激した。

2年　古谷信幸

　我等ハンドボール部の目指す全国大会が先日廿日市で行なわれた。日頃の練習が実を結びめでたく優勝できた。又この勝利により栄誉ある日韓親善大会の出場権が得られたから喜びもひとしおであった。雨の中での試合で苦しかったが順調に勝ち進んだ。決勝で強豪中大付属高と対戦し見事はれの栄冠を勝ち得た。〝バンザイ〟初優勝限りなく出て来る涙、ほんとうにうれしかった。私にとってこの感激は一生忘れる事のできないものになるだろう。又この喜びと同時に私達二年は先輩の築いてくれた伝統を守り抜き来年も是非頑張らなければならないという責任とで胸がいっぱいだった。韓国では高校生であることを忘れず正々堂々とフェアプレーの精神で戦い共に親善の薫を十分に果したと思う。短い期間ではあったが私は人間的に大きく前進し又高校生活の良き思い出となったことをうれしく思う。

3年　今浦　隆

　ハンドボールを行なっている高校生にとって最高の全国高等学校総合体育大会、すなわちインターハイにおいて、夢であった全国優勝をする事が実現出来た。ハンドボール結成いらい我等中央工が全国優勝出来たのは、このたびが初めて、まして我々の力で実現出来るとは夢にも思っていなかった。来年も勝利の座を守ってほしい。

　また我々は日本を代表して韓国で親善試合を行なった。試合が終り見学、選手との対話、選手は中央工だけでなく日本選手団を歓迎してくれた。私は学生最後の夏を全国優勝、韓国遠征という、すばらしい思い出とで過ごした。

2年　西村健治

　喜こびの余り泣いた選手、先輩迄も夢にみたこの初優勝に涙を流した。だが私は涙を出すほど嬉しくはなかった。それよりはゲームに出場出来なかった、いや出場出来る迄に達成していなかった技術の未熟さがくやしかった。
　来年は我々2年がこの王座を守るのだ。その為に今のいまから精神こめて、和を合言葉に、苦しい練習に耐えぬいて行かなくてはと思うのである。

2年　皆本義典

　優勝した時は飛上がって喜んだがと同時に二年である自分は来年のことの重大さを感じ今まで先輩が作り上げた基礎と伝統を守りぬこうとゆう責任と不安を感じた。
　韓国は自分の考えていた以上に国民がスポーツに対して感心を持っているのにおどろいた、特に自分たちが遠征中寝起きしていた選手村などは誰でも合宿が出来ると言うことを聞いて感心しました。
　それから韓国のハンドボールチームの特長はサイドシュートを中心とした攻めでありルールも日本と感じが違がっていたせいもあるが新人戦以来初の一敗を食った、しかしこの一敗は反省をするためには良かったかもしれない。

2年　鬼村浩治

　インターハイ出場だけでも、我々はうれしかった。
　七月二十七日からのインターハイは、あいにくの雨で、一試合一試合が日頃の練習の六〇%程度しか出せなかったのが残念です。しかし、チームワークが良くとれたためにこんどの初優勝と言う結果になったのだと思う。
　初優勝の歓びは一人一人同じであったと思うが、我々二年生は、今年最大の喜びと思い出と、また来年頑張ると言う意志が強くなった。

2年　酒井　進

　終了のホイッスルが鳴ると同時に、歓声が上った。飛び上がったり、涙を出して喜こんだ。初優勝、しかしこの勝利も、毎日の練習とチームワーク、それともうひとつ、先輩の努力も忘れてはならないと思う。それと、優勝ということは、伝統を築いたと共に、我々二年には、責任の重大さを胸にやきつけた。しかし喜びもつかの間、もう次の目標、韓国遠征、国体予選を目ざしていた。

　韓国での親善試合は、一勝一敗の成績に終わったが親善の大役は十分果たしたと思う。しかし負けを知らなかった。我チームにとってこの一敗は、一つの反省と転機になり、これからの練習課題を与えてくれた。

2年　西島　勝

　今まで練習してきた力が大いに発揮出来、どこまで我チームの実力が通用するかがわかる全国大会が初まった。全国大会出場の選手を見ると僕の目には、すばらしい技術とチームワークの持ち主に見えこれらのチームに我チームの実力が通用するのかと思うとすこし心配になったが、苦戦しながらも順調に勝ち進んで行き優勝戦に挑んだ。そして我チームの作戦勝ちの時、この瞬間を今までに多くの先輩達が挑んで果しえなかったことを果し得たと思うとうれし涙がわいてきた。何とも言えない喜びが勝利者の栄誉を感じさせた。それと同時に来年度の全国大会は無条件に出場できるという贈り物を僕達二年は与えられ下関中央工ハンドボール部の名を恥しめないようにがんばりたいと思った。
　国際試合に出て日韓親善の大役も果した三年生を見て僕達も二年生に負けないくらいがんばりたいと思った。

平沼会長の思い出（1）

松本良三

平沼会長とスポーツ

私が平沼氏に始めて御目にかかったのは、今から60年以上も前のことで、私は未だ小学校の生徒であった。母に連れられて、横浜平沼町のお店に上った時である。そのお店は板敷きで、洋式の家具が入っていた。氏は「おばさん、夕方になると、此テーブルや椅子を片づけて、撃剣の稽古をするのです。」と言われた。つまり、その時分、既に、氏はスポーツ熱心であられたのである。平沼氏の父君と私の父が従兄弟同志であり、又、私の父がすすめて、氏を慶応の幼稚園に入れるようになったことなどもあり、平沼氏は私の母のことを「おばさん」と呼ばれた。

衆議院での処女演説

次に平沼氏に関する私の古い記憶と云えば、氏が始めて、衆議院議員になられ、その新任式の後で、私の生家である日本橋の本町の店に来られた時である。それは浅春、小雨そぼ降る日であった。氏は此の時、鍛え上げた体駆にキチンと燕尾服を召され、其の上に、当時めづらしかったレーンコートを羽織られ、颯爽たるお姿であった。氏は私の母に「おばさん、今、新任式を終えました」と言われた。当時、自動車は余り無く、氏は待たせてあった人力車にとび乗って急いで立ち去られた。それから間も無く氏が衆議院で行った処女演説がスポーツ振興に関するもので、それは文字通り、当時画期的のもので世間では驚異の眼をみはった。

栴檀は、二葉より香んばし

平沼氏が去られた後で、私の母は「あの児は（平沼氏のこと）小さい時からまめ（忠実）で物堅い性質であったがやっぱり偉くなった」。と言ふのであった。「あの児は何か世話すると、次の日曜などに、よく鉢植えなど持って来て『おばさん、是れあげる』。と云って、それとなく礼に来たものである」。と云ふのであった。「栴檀は二葉より香んばし」。とか、此平沼氏の「まめ」で「物堅い」性質、即ち「勤勉」にして「公正」を喜ぶ性質が、極めて自然にスポーツに親しむようになり、又、あのちょっと類の無い対人態度、それは戦後、無暗に口にされる「民主的」などとゆう、とって付けたようなものではなく、人に対する自然な平等観を持つようになられたのではないかと思う。平沼氏は、その生涯を通じ「閣下」とか「先生」其他の物々しい称号で呼ばれたことがなく、常に「平沼さん」とか「亮ちゃん」と親しまれたのは、氏の企まざる人間性の反映と見るべきで、実力以外は何物も認められないスポーツ界の考え方に徹して居られたわけなのである。

偏見、スポーツ、真理

筆者がウィスコンシンのE・A・ロス教授のゼミナーで読まされた参考書の中で、あるスポーツ・コーチがスポーツ技術の進歩は選手の人としての成長に正比例するとゆうことを述べていたのを憶えている。又、かの有名な社会学者G・ジムメルがその著「Soziologie」の中で「スポーツの世界は、純正な社会過程を示すもので、それは自己完成の競争以外には、何ものも内容としない」。（同書二〇〇頁）と述べているのも、是れと軌を一にするものである。又昭和39年の東京のオリンピックに、米国の柔道、重量級の選手として出場したB・M・キャメル（彼れの名は、キャムプベルと発音してはいけない）とよく、米国大使館の食堂で食事を共にしたが、次のような会話を交したことがある。「私は運動選手とつき合うのが好きだ。彼等は偏見を持たないからだ。」と言った。キャメルは是れに対し、「偏見！とんでもない。そんなものはスポーツには、通用しない。殊に柔道には全くだめだ。」と言った。玆で、お断りして置き度いのは、此偏見とゆう言葉は、米国人にとっては多分に、有色人に対する人種的偏見を意味するもので、普通の米国人は、此問題に触れたがらず、従って、偏見とゆう言葉は、彼等との会話には一種の禁句である。此し、此キャメルとゆう男は、極めて若い時から柔道を習い、殊にオリンピックの前、数年は日本に住んで、謂わば柔道の真髄を、直接、斯道の大家からくみ取った男である。従って、彼は日本人に対し偏見を持たず、私は此男なら大丈夫と思ったので此様な会話をしたわけである。私は米国人に限らず、日本人でも偏見の強い人との接触を出来るだけ避けるのである。偏見とゆうのは、要するに一種の「虚構」であり、此種の人は真理を語らず、こんな人と話をしても何等の霊感を感じないからである。

體徳不二

其後、幾度か平沼氏に御目にかかったのであるが、私の印象に深く残っているのは、ハンドボール協会発会式の祝宴の折りに、誰れが言い出したか、寄せ書きをしようとゆうことになり、会長がその題字として、氏の独特な筆蹟で「體德不二」と書かれた時である。

此お言葉は、一見、自明のようであるが、それはそう簡単なものではないようである。然し私は此のお言葉を体して送球の面倒を見ようと決心した。そして此の小論も是れを中心として書いて見た。是について会長が直接に述べられているのは、私の知る所では、次の一文があるだけである。

體徳不二「昭和十五年国を挙げ

て紀元二千六百年祝賀の祭典が行なわれたことは未だ記憶に新なところであらう。その年の奉祝明治神宮国民体育大会に際して、厚生省では、我が国に於ける体育功労者を選び、表彰状と功労賞を贈ることになったが図らずも私もその選に入った。

その際選ばれた五人は、剣道の高野佐三郎、柔道の磯貝一、体操の永井道明、水泳の末広厳太郎の諸先生と私とである。

その同じ年の十月三十日には教育勅語渙発五十周年の記念日に当り、文部省ではこの日をトして全国の教育功労者を表彰することになり、私も木盃を戴 いたのである。

この時も横浜体育協会では、我が事のやうに喜んでくれて、祝賀体育会を催したのであったが、協会は又、青年団と共同で記念競歩大会を計画した。

神奈川公園を出発点として私の宅の前まで来て通過章を受け横浜公園に至る十七キロのコースをオリンピックに競歩選手として出場した弘田英治君も加はり、老若男女合計二千六百名が参加した。一着は五八分であったが、私は二時間八分三〇秒で、それでも一般男子上級には六分三〇秒を余して合格することになる。

この時上級の合格者には記念として、私に「何か色紙に書け」と関係者がいう。これは恐縮ものだが、私の書いたもので皆さんが喜んで戴けるならと、拙い筆を揮ふことにした。文句はいろいろ考えた末、「體徳不二」とした。體徳不二はスポーツに対する私の信条である。」

オリンピックと日本精神

右の他「スポーツ生活六十年」、の中に見られる特に「體徳不二」に関するものと思われる会長の御言葉を抜萃させて戴く。

オリンピックと日本精神「この大会に就いて特に書いて置きたいのは、前にも記したように、我々の出発に当って畏くも多分の御下賜金を賜はり、それを頂戴に参った時に、宮内大臣から特に御言葉があった。その後内田鉄道大臣から、御陪食の席上で、これに就いて優渥なる御諚を拝したと漏れ承はり、我々一同恐懼して、日本精神に反する行為は断然致しませんということを堅く御誓い申上げたのである。これは度々何か集りのある度毎に選手にも申し聞かせ、全くそうした気持で終始したのであった。いよいよ大会の幕が切って落されると、マラソンと三段跳で勝ち、捧高跳と一万米で立派な成績を得、水上でも壓倒的な勝利を得て、勝利の上に於ても可なりの成績を挙げて帰って来たのではあるが、この事は我々として左程偉そうに報告する程のことではない。しかし、スポーツマンシップに終始したということだけは、特に判っきり断言することが出来ると思う。」

武道精神

日本の武道にしても、外国のいろいろのスポーツにしても各々特徴がある。日本の武道が優れていることは素より異論のないところであるが、そうかといって一概に外国のものを蔑にすることも宜しくない。スポーツにも相当よいところのあることを認めねばならぬ。しかし、日本の武道の万国に冠絶する所以は、たとえば柔道をやって護身術を学ぶとか、剣道をやって敵を倒す術を覚えるとかそういう実技を学び身体を養うこと以上に精神修養という上において、武道なるものが役立つことを痛切に感ずるものである。

それに就いて先年、高野佐三郎先生がアメリカから帰られた後、諸方で講演をされた時に、向うで第二世の青年の様子を見ると剣道をやっているかいないかは、一見してすぐ分る、といわれた。それは先生は剣道の達人だから、青年達の格好とか、身構えを見ただけでも分るのであろうといったところ、イヤそうではない、それほど深く稽古をしなくとも、剣道をやっているものは少くとも礼儀作法が正しい。彼地で会った第二世のうちでも和風の礼儀作法を心得ている者に会って、これは剣道をやっている者であらうと訊ねると果してそうである。これだけでも武道といふものが非常にそういふ方面に効果があることが判る。といわれた。

それに就いて思ひ出されるのは私がオリンピックで渡米したのは高野先生よりも先であったが、先生にそういわれて見れば成るほどと思い当ることがしばしばあった。剣道のみならず、柔道でも弓道でも、日本古来の武道を錬磨している者は確かに非常に礼儀正しいといふことを深く感じたのである。如何に西洋のスポーツがいいといっても、その点は我が武道の長所で、外国の運動が一疇を輸する所以である。

小泉博士の平沼観

以上により、会長の「體徳不二」という御言葉の意味が那辺に存するかは、およそ推する事が出来ると思うが、平沼氏と親交のあった元、慶応義塾塾長故小泉信三博士の平沼観を引用して平沼氏のお人柄の全貌を明かにする。博士曰く、「平沼氏は何故にスポーツを好むか。それはきいて見たこともなく、又平沼氏に於て態々考へて見たこともなかろうが、思ふに氏は、第一に所謂運動神経に富み、天性体技に巧みで、身体を動かすこと其自身に快感を感ずる人なのであろう。しかしそれよりも更に氏の好むところは、運動家の精神であらふ。快濶晴朗公正無私という如き運動家の美徳が、殊に平沼氏の性に合っているのであろう。理窟の嫌いな平沼氏は、運動家の道徳に就いても特に言葉で人に説いたことはあまりあるまい。しかし常に私を後にして公を先にし、人に待つことが寛大で、絶えて求むるところなく、ただ与えて及ばざらんことのみを惧れる平沼氏の日常の実践が、いかなる言葉よりも力強く其事を説いている」。

平沼氏の家系

平沼氏は明治12年2月25日に生まれ、昭和34年2月13日に逝去された。氏は多年に亘るスポーツ、政治、実業界に於ける功績に対し、勲一等瑞宝章を授けられた。

平沼家は程ケ谷の旧い農家であり、代々九兵衛を名乗ったが、平沼氏はその八代目であり、氏に至って九兵衛を廢した。六代目が今の平沼町の辺を埋立て、天保末頃から製塩に従事し、それが平沼家の富の元となった。

平沼氏御存命中、やはり横浜で繁昌して居た平沼専蔵とゆう人があったが、是れについて、平沼氏は次のように述べられる。「平沼専蔵氏と縁続きでもあるように思われる方もあるが、同じ土地にいた同姓というだけで全然関係はない。これについては珍談がある。

（7頁につづく）

広い視野から選手を選こう

頂点強化の具体案軌道に

世界選手権、ミュンヘン・オリンピックに備えての男子選手強化策の具体化を急ぐ日本協会では、このほど保坂会長代行、西、渡辺馬場各副会長、荒川理事長らがその基本線（骨子）の確立について話しあいを行った。

その結果、荒川理事長の主張する「初年度はできるだけ多数の優秀選手を〝強化〟の対象とする」という意見にそって選手の選こうを行ない、8月24日から奈良で開かれる第11回全日本教職員選手権を終えたあと、9月中旬までに約60人をリストアップし、ずい時優秀選手をこれに加えていくことを申しあわせた。

選ばれたプレイヤーはとりあえず初年度は、選手の所属地（勤務先、通学先、現住地の何れか）によって東、中、西日本の3地区に分け、強化を進めることになる模様だ。

なお、東日本地区の指導責任者として竹野奉昭（日体大出・大崎電気男子監督兼選手）、中日本地区は稲石三二（日体大出・桜台高部長、前回男子世界選手権コーチ）、西日本地区は村田弘（日体大出・大阪イーグルス監督、前回男子世界選手権監督）の三氏が内定している。

荒川理事長の話　選手は広い視野から多数を選こうし、徐々にしぼっていくというのがいちばんよい方法だと思う。

9月中旬に60人ほどの選手名を発表する予定だが、名称は「ナショナル・プレイヤー」でも「オリンピック強化選手」でもよい。

今後も有望選手の発掘はつづけ補充は積極的にやりたい。

ミュンヘン五輪などを協議

（ＩＨＦ総会）

第12回国際ハンドボール連盟総会は8月30、31の両日オランダのアムステルダムに世界諸国の代表を集めて開かれる。

総会の主議題は、会長以下の役員改選のほか「一九七二年のミュンヘン・オリンピック」「一九七〇年の世界男子7人制」「次回の世界女子7人制（注・一九七〇年または七一年に開催の予定）」などになるものと思われる。

各国から提案されている議題には「ヨーロッパ・カップにヨーロッパ地区以外からも参加を呼びかける」「世界選手権大会の予選ワクの大陸単位を改める」「ミュンヘンオリンピックに女子実施」ルールについては、「世界選手権の際のグランドの大きさを20×40ｍに明文化する」「複審制の問題」などがある。

荒川理事長、総会へ出発

ＩＨＦ総会に出席する荒川清美日本協会理事長は8月17日午後10時30分羽田発のＪＡＬ機で渡欧した。

荒川理事長は西ドイツに立ちよったあとオランダ入りする。帰国は9月6日の予定。

なお、馬場太郎副会長は都合で総会への出席をとりやめた。

埼玉教員に初栄冠

第11回全日本教職員

【速報】第11回全日本教職員大会は8月24、25、26日の3日間奈良市の県立橿原体育館に全国から21チームが参加して開かれ埼玉教員が大阪イーグルスの7連勝をはばんで優勝した。（詳報次号）

▽準決勝

大阪イーグルス	32（18－14、14－7）12	福岡教員	
埼玉教員	31（19－12、12－11）23	スワロー兵庫	

▽決勝

埼玉教員	17（10－7、7－7）14	大阪イーグルス

新たに甲村（田村紡）川崎（大崎）

新保、長谷川が辞退　世界女子の全日本代表

日本協会では、このほど、12月モスクワを中心に開かれる第4回世界女子7人制選手権に出場する全日本代表選手のうち、新保郁子（大洋デパート）長谷川邦子（田村紡）両選手に代って、川崎幸子（ＧＫ・大崎電気、静岡城北高出）、甲村加代子（ＦＰ・田村紡、半田高出）の両選手を出場させることになったと発表した。

これは新保選手が一身上の都合で長谷川選手が健康上の理由でそれぞれ日本協会へあてて〝代表辞退届〟を提出したため変更されたもの。日本協会では、代表選手団（団長・田村正衛、監督・小袋是郎）と話し合い2名不足のまま出場するか、補充をするか協議を行い、8月長崎で開かれた第20回全日本総合選手権の結果をみて荒川日本協会理事長、小袋監督らが再度協議しチーム編成上、田村紡から一名、ＧＫを一名選出ということにまとまって、甲村、川崎の両選手が指名された。

この結果、代表選手団の構成は田村紡7、大崎電気4、大洋デパート2、三菱鉛筆1となった。

ネデフ（ルーマニア）氏の日程

大崎電気が招いたルーマニアナショナルチームのコーチ、ニコライ・ネデフ氏の主な滞日々程は次のとおり

▽9月2日　大崎電気－大阪イーグルス戦主審担当（大阪）▽7日実戦指導（大崎電気埼玉工場コート）▽8日指導者講習会（同）▽14日指導者講習会（名古屋）▽15日、第18回全日本学生選抜東西対抗戦見学（同）▽21日指導者講習会（熊本＝予定）▽22日指導者講習会（大阪＝予定）▽27日帰国

このほかの日（9、16、23日を除く）は埼玉県入間郡の大崎電気埼玉工場コートで大崎電気男女チームを指導。

西ドイツ球界の現状

―トルカ氏より村田氏への手紙から―

昨秋来日した西ドイツチームの役員諸氏は日本との応援及び日本の風物に感激し、その後も日本側の役員諸氏との間に文通が続き、大いに親善の実をあげている。

監督として、来日したヘルムート・トルカ氏もその一人で、協会技術部員の村田弘氏のところに、最近の西ドイツ球界、特に女子球界について頼りがきた。この12月の世界選手権予選リーグで同じ組に入っている西ドイツの球界からの――しかも女子ナショナルチームのコーチからの――便りであるので、村田弘氏の了解を得、ここにその大要を紹介しよう。

☆　☆　☆

トルカ氏は西ドイツのナショナルチームのコーチとして活躍中である。選手団の編成を昨シーズンの試合を見て、決めている。その中には多くのハンブルグの選手も入っているとのことである。（西ドイツの女子球界の現状から見てハンブルグの選手達が数多くナショナルチームに入ってくるのは当然と思われる。）

昨冬には、数多くの国際試合を計画し、実施した。ルーマニア、ユーゴースラビア、ノルウエー、デンマーク、オーストリアなどとである。

オーストリアとの試合は楽勝であった。というのは当然で、オーストリアの女子チームはほとんど、7人制ハンドボールを経験していなかったからである。

ノールウエーには10―8で勝利を握り、対デンマーク戦は13―12で辛勝をした。

ルーマニアとユーゴースラビアとの試合は完敗してしまった。

この両チームは私達がここ二、三年では、とても到達することのできない、高度の技術・戦術をもっている。（予想どおり、ルーマニアもユーゴースラビアも強力なスタッフであることが判ろう。）

これらの結果を、前回三位の西ドイツチームがどういう見方をしないでもらいたいと思う。

私どもの女子選手は残念ながら体験に乏しく、十分に体験をつんだ強力チームに対抗するには十分な力強さをまだもっていないのです。

今度対戦したチームはまだ一年も一緒にプレイをしていたのではなく、十分なコンビネーションもとれていないのです。

私の本当の目標は1972年のオリンピックにあります。

幸い今年のソ連での世界選手権で私達は予選をしないでもすみました。

私はあなたのお国の女子チームの強さも知っていますし、また名コーチに率いられているデンマークも男子2位の実績に鑑み、男子に続けとばかりに強化してくるでしょう。

私達のチームは十分な時間もなく、やりたいことは沢山あるのですが、それを十分に果して、大会に臨むことはできそうにもありません。

体力面でも、技術面でも、鍛えておかなければならないことは余りにも多いのです。しかもほとんどお金はありません。

デンマークについては、早いテンポの試合をすることをお推めします。というのはデンマークの女子選手はあなたがたのチームのように早い動きはできません。

デンマークには3人ないし4人のいいポストプレーヤーがいるのです。またいいパッサーが一人います。キーパーは絶品です。コーチのクヌード・クヌードセンはきわめて体験の豊かな人です。

そのような訳で、ドイツのチームもがんばらなければなりません。

ミュンヘンオリンピックのためにも、日独一緒になっていい成績をあげるように努力したいと思っています。

☆　☆　☆

今年度の世界選手権を踏み台にし、絶好調を決定されてはいないがミュンヘンオリンピックにもっていこうという西ドイツ球界のひたむきな情熱が溢れています。うからかできませんよ！

三菱鉛筆がスポーツユーゲント（西独）と交歓

来日中の西ドイツスポーツユーゲントの一行30名は、8月18日横浜市に立ち寄りスポーツ関係者とこん談したあと午後4時から同市三ツ沢球技場でハンドボールとサッカーの交歓試合を行った。

ハンドボールは、当初女子のゲームが申しこまれ、ハンドボールを国技とする西ドイツだけに神奈川、横浜両協会では全日本2位の三菱鉛筆を出場させたが、スポーツユーゲント側にほとんど経験者がいないため、男子をまじえての〝対戦〟になった。男子のなかに11人制クラブのレギュラーが一人おり、鮮やかなプレーを見せたが、それ以外の選手はまったく三菱鉛筆のテクニック、スピードに振りまわされ前半で大差がついた。

三菱鉛筆　20―12　スポーツユーゲント

フランス技術の研究（13）

コンビの練習に時間を

訳　藤本　強
（日本協会常務理事）

攻撃を開始する際の選手の配置

攻撃を開始する際に、どのような形に選手を配置するかは、その後の攻撃の展開をどのようにしていくかを決定する際にもっとも重要な要素となる。

もちろん相手チームの守備陣形相手チームの個々のプレーヤーの能力、味方のコンビネーションならびに味方選手の攻撃能力・特色によって大いに変化してこなければならない。

いくつかの例を挙げよう。これを各チームは適当にそれぞれのチームに適した攻撃配置をとるようにしていくのが、もっとも望ましいことである。

例1（第1図参照）

4人の攻撃側選手を左サイドに集め、2人の攻撃側選手を右サイドに置く配置である。この例では、左サイドにまず重圧をかけておいて、守備側を左によせ、中央ないしは、右サイドから、最終的な得点を考えるという形をとっている。

ごく普通の配置の浮いた位置中央にいる選手とポストの選手が左サイドに位置をかえたものとして、とらえることが可能である。

例2（第2図参照）

3人の攻撃側選手を一方に集めて、他の3人は他のサイドによる形をとっている例である。

中央を広くあけ、そこに攻撃拠点をもっていくフォーメーションである。

ポストに入る選手と、浮いた位置中央の選手が左右のサイドに別れた形としてとらえることが必要である。

この例の場合、ポストの選手は左サイドに、浮いた位置中央の選手は右サイドによった形となっている。

中央から攻撃をしようとしている際には、応用面が非常に広く、切りこみなどもあらゆる方向からできる使用範囲の非常に大きなフォーメーションである。

例3（第3図参照）

2人の選手をいわゆるダブルポストの形でエリアライン近くに入れ、4人の選手はサイドの選手をも含め、やや浮いた位置に入るといった形をとっていフォーメーションである。

通常の形から考えると、ポストにいる選手が、片方のサイドに動いて、浮いた位置中央の選手がポストの選手と逆のサイドのポストに入り、サイドの選手がやや浮いた位置にあがっている形としてとらえられよう。

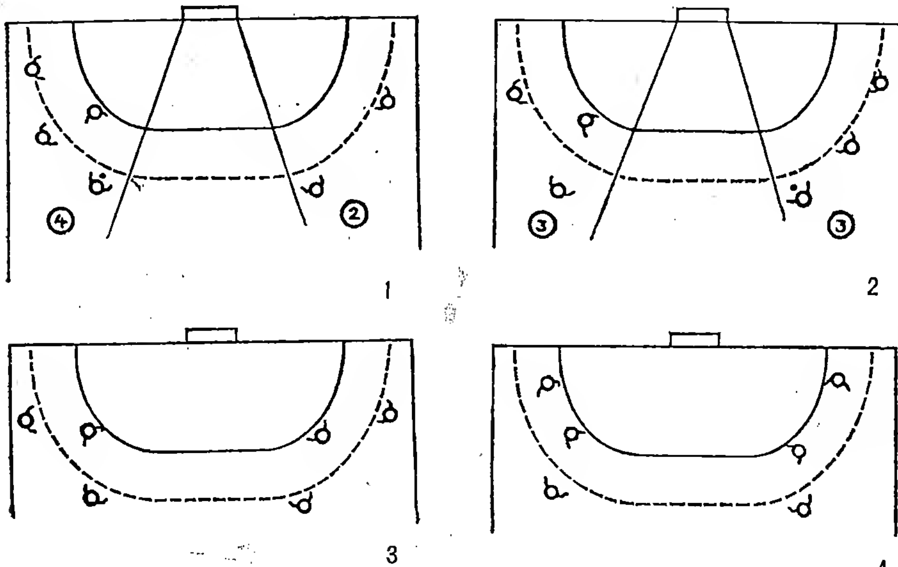
このフォーメーションの場合、サイド、ポストが攻撃拠点として考えなければならない。

例4（第4図参照）

前例とは逆にエリアライン近くに4人の選手を配し、浮いた位置に2人の選手を配すフォーメーションである。

いわゆるダブルポストになっているが前例とはやや異なり、ポストとサイドの選手がエリアラインに4人でピタリとついて、攻撃を開始することになる。

通常のフォーメーションから考



えると、例3同様にポストの選手と浮いた位置中央の選手がダブルポストの位置を占め、サイドの選手はエリアライン近くまで入っているという形である。

例3とはサイドの選手の位置が違っていることだけが差異であるが、このフォーメーションをまずとった場合には、ポストとサイドで選手が交替したり、動いたり、しながら、バックのディフェンスラインを沈め、その沈んだ所をねらって、ロングシュートで攻めるという形を最終的にとることになる。

ロングシューターが2人の場合には、きわめて有効な攻め手となろう。

以上の他、通常考えられ、使われているポストに1人、サイドに2人、浮いた位置の中央・右・左に各1人を配置するごく一般的な形、例1の逆の場合など多くのフォーメーションが考えられる。

競技に於ける選手間のコンビネーション

コンビネーションというものは守備と同様に攻撃に於いても、自動的にしかもチーム全体が集合的に、頭で考えずにとれるようになっていなければならない。

この〝集合的オートメーション〟になるまでには、十分に時間をかけ、体で覚えこむという形をとりながら、しかもチーム全体で行なうという練習を十二分に行なわなければならない。

これにはもちろん、体力、技術戦術といったものが十分に伴なわなければならないのであるが、多くの時間をこのコンビをとることにさき、併せて、体力、技術、戦術面も磨いていくといった形をとることが望ましい。

コンビネーションの練習をすることによって、個々の選手の身勝手な行動、たとえばボールをもつと、なかなか離さないとか、すぐシュートするとかいった欠点は克服されようし、チームのために動くといった動きも多いに知り、体で覚えこむことにもなっていくであろう。

コンビネーションをとる場合、以下に述べることは不可欠の要素となってくる。

1　各選手の技術がある一定以上のものであり、十分に統一がとれていること（たとえば、パスの能力、キャッチの能力、シュート力フエイントの力）などが必要となる。

2　相手ディフェンスが十分な能力をもっている。

3　かなりの人数をもって、交替しながら臨むこと、状況に応じ、適宜、攻守の判断がつき、シュートチャンスも明確な判断がつくようになる。

4　くりかえし、練習する力があること。多くの時間を、それぞれの選手がたえながら、体力的にも精神的にもまいらないものが必要となる。実際にコンビに入らない時でも、よく観察し、すべてを知る必要がある。

5　ゲームの展開方法を決めること、通常キャプテンが行なうが、数、シグナルなどによって適宜どのフォーメーションを採用して攻めるかを決められるようにしておくこと。

この指示は二つに分けるべきである。

第1は攻撃開始の際の選手の配置についての指示であり、第2は攻撃を開始する時期についての指示である。

個々の選手がバラバラのことを考えていたり、バラバラのタイミングで走り出したりしたならば、コンビネーションはなりたち得ない。

コンビネーションというのはごくデリケートにできているものなのであるから、この点は特に重要な点である。

6　まず実際の練習に入る前に、黒板などを使用し、全員にそれぞれの役割、ゲームの展開、タイミングを熟知させておくことは必要なことである。

7　まず敵なしで行ない、そして敵をつけ、両者を比較しつつ、タイミング、位置を十分に知り、難易をはっきりと、ゲームの展開の中でどの部分が難かしく、どの部分が比較的容易かを選手自身でみつけさせ、それをのりきる方法を見つけ出させることも重要な点となろう。

それぞれの選手の役割を攻撃開始の際にもう一度思いおこさせ、それをそれぞれでどのように行なうかを十分に考えさせる。

8　強力な守備陣をつけ、がっちりしたアタック、しかも正しいアタック（理論にあったアタック）をさせ、そのフォーメーションの難易を詳細な点まで検討する。

このような練習をくりかえすことによって、ディフェンスの中でシュートチャンスをつかむことを覚えていかなければならない。

コンビネーションのためのコンビネーションでは実戦では、むだなのであることを肝に命じておかなければならない。一つのフォーメーションは必ず対応策が現れ、それを乗りこえることを工夫することによって、新しいフォーメーションが生れる。

基本的な原則はすでに学んでいるのであり、すべての変化をつくすことはできない。相手の出方も千差万別であろう。それに対応しうる選手、チームが必要になる。

球界パトロール

真の成果は来年度以降に

国体めざす高校選抜編成の話題

○……第23回国民体育大会ハンドボール競技は、10月1日から福井県高浜町で開かれるが、今年から高校部門も県単位の選抜混成チーム出場が認められている。

高校界には現在、全日本、国体と二つの〝全国大会〟があるが予選を勝ち抜いて檜舞台を踏めるのは限られたチームと選手だけだ。

埋れた逸材を陽の当る場所に押し出せるし、一気に飛躍をめざす地区では〝三本の矢〟のたとえのように一校だけのもろさを複数で強めることも出来るとこの措置は歓迎され、初年度にもかかわらず男女とも選抜(混成)とした県が岩手、群馬、埼玉、千葉、静岡、岡山の6県に及んだ。

○……このうち、混成の特権を最大に活かしたのは千葉の女子選抜だろう。

国体に出場するのは男女(高校)を通じて初めてなばかりか、千葉のチームが関東を制したのは昭和26年に県協会が出来て以来今回が初めてである。予選では準決勝で前年の国体優勝校栃木女を破り、余勢をかって栄冠を得たものだが、2週間前に行われた関東高校選手権では2回戦にも進めなかった千葉勢が、みごとに〝結集の成果〟をあげたのは特筆されよう。

このほか愛知勢におくれをとっていた静岡男子が8年ぶり、京阪勢におさえられていた兵庫男子が7年ぶりに代表権を得たのも選抜の利を活かしたものといえる。

○……しかし、この制度には難点が多いとする声も少なくない。

『高校生はあくまでチームプレーに徹することで訓れんされているから選抜によってレベルアップされるとは思えない』という意見は特に強い。

ある地方の役員が『選抜の方法、選抜チームの強化費をどうするといったことから、練習場所やユニホームの色にいたるまで面倒な問題が起きそうだ。軌道にのるまでは単独チームの方がよい』といっていたのも現状の一面を伝えたことばだろう。

○……初の選抜チームを編成した県の選こう方法をのぞいてみると、全日本高校の予選終了時に国体候補選手を選び、8月末にセレクションマッチを行って〝代表〟を決定した県、従来どおりの予選のあと優勝校に若干の選手を補強したところもある。また、岡山のように早い時点で編成を終わり、8月の県大会には〝選抜〟として出場、計画的にプランを進めた県もあるといった具合にまちまちだ。

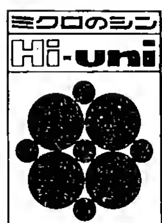
○……日本協会筋でも、「今年度はどこも手さぐりの状態だが、次第にこのシステムを採る県が増してくる」とみており、むしろ来年度以降にその成果の希望をかけているようだ。(X)

ハイ-ユニ

黒く・濃く・きれいに書ける理想のシン

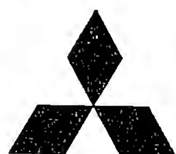
そのヒミツは

理想の粒度配合



9H 6B・17硬度

1ダース1200円 1本100円



三菱鉛筆

三菱鉛筆株式会社

連載・技術教室⑤

シュートからみた女子選手（上）

—第８回全日本実業団女子ハンドボール選手権大会—

5 強実業団チームの実力分析——北川浩

（日本協会技術部員・女子第２回世界選手権チームヘッドコーチ）

1968年２月７日～11日の間５実業団チームの リーグ戦が行われた。強チーム同志の試合が比較的同条件に於て行われるこの種の大会に日本女子ハンドボールの姿があり、日本トップ、チームの共通点や、汗で画がれた各チームの記録には大いに参考になるものがある。

試合結果は以前報導されたが、シュート力を知るためにもう一度書くことにする。

リーグ順

チーム	得点	得点	チーム	両チームのシュート計
大崎	14	8	愛知紡	65
田村	7	3	三菱	64
三菱	15	8	愛知	65
大洋	7	6	大崎	66
大洋	17	6	三菱	68
田村	17	8	愛知	82
大崎	6	5	三菱	87
田村	9	8	大洋	58
大洋	21	6	愛知	73
田村	11	8	大崎	61

各チームのシュート数と得点率

チーム	試合成績	4試合のシュート数	得点	得点率
田村	4勝0敗	120	44	0.366
大洋	3　1	206	53	0.257
大崎	2　2	141	34	0.241
三菱	1　3	124	29	0.241
愛知	0　4	138	30	0.217

シュート別　得点率

チーム名	ジャンプシュート	ステップS.	スタンデングS.
大崎	12 得点 76 シュート	6/2	
愛知	32/2	40/12	0.30
田村	33/9	16/4	0.25
三菱	45/5	15/4	0.25
大洋	38/11	51/9	0.17
計	224/39　0.174	128/31	0.24

以上の表によりリーグ戦を通じて689本のシュートが放れた198点を得たのである。得点率は0.287である。

得点率の平均0.287を上回ったのは田村だけ、しかしシュート数が少ない。率は落ちてももう少しシュート数を上げたら得点はもっと多くとれるだろう。シュートピッチを早める様にすれば大洋は60点以上とれる実力があるはず、別表シュート分類を研究することを望む。

どんな相手にも３割何上の得点率が挙る様に努力することが必要である。

ジャンプシュートについて

全シュート（689）中の3/1近くジャンプ動作によるシュートが行われているが得点は39点 0.174 の低率である。外国人の日本評に「日本人は小さいくせにジャンプシュートばかり打ちたがる」にあてはまる。

0.366の高率の田村も ジャンプシュートは３割を下迄っている。

各チームのポイントゲッターが多くシュートしているがあまり信頼のおける成績ではない。

個人別に見ると大洋新保 12/6 0.5 でトップ、田村種村 9/5 0.55 もよい成績である。

10シュート以上の もので大崎加藤 22/4、大崎早川16/2三菱江川24/2三菱阿部15/2大洋枝尾12/1では「相手のボール」にした方が多くてもつと得点しなくてはチームに対する貢献度は少ない。

ステップ・スタンデングシュートについて

リーグ戦全シュート（689）の約5/1がこのシュートである。大崎はわずかに６本であり走る直行型攻撃の性質を良く表現している。

田村、三菱は大たい平均であり愛知はその上である大洋はシュート数は多いが低率の0.17である。個人では愛知小林 27/11 で トップ。後は大洋勢が 多く 新保12/4、垂水12/1射場9/3枝尾7/0位が多くシュートした人々である。（つづく）

ハンドボール競技、技術調査表

（ルーマニアスポーツ病院方式）

チーム名	三菱鉛筆 15 — 8 愛知紡																							
選手名																								
背番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
ジャンプシュート ◎得点 ○不成功		2/1	1/0				5/2		2/0	7/1		17/4		1/0	7/0	2/0	2/0							12/0
ランニングシュート																								
スタンデングS ステップS														8/3		1/1		1/0						10/4
フエント・S（1:1等の情況より相手を抜いた時）					1/1	1/1						2/2				1/0			1/1					2/1
ブロンジョンS 飛び込み（低） 倒れ込み					1/1	2/2	2/2			1/0		6/5		2/1	4/0	1/0		1/1						8/2
速攻によって生じたS		1/1	1/1									2/2												
ポストプレーによって生じたシュート																								
フリースローからのシュート		1/0										1/0			1/1									1/1
7mスロー										4/2		4/2												
其の他特殊なS																								
計		4/2	2/1		2/2	3/3	7/4		2/0	12/3		32/15		7/4	12/1	5/1	2/0	2/1	1/1					33/8

チーム名	田村紡績 9 — 8 大洋デパート																							
選手名																								
背番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
ジャンプシュート ◎得点 ○不成功		3/3	1/1		1/0		4/1					9/5 0.55		4/3	1/0	1/0			4/1					10/4 0.4
ランニングシュート																								
スタンデングS ステップS			1/1	2/0	1/0		2/1					6/1 0.17		2/0	2/0	3/0	3/0		1/0					11/0
フエント・S（1:1等の情況より相手を抜いた時）																								
ブロンジョンS 飛び込み（低） 倒れ込み						1/0						1/0						3/0						3/0
速攻によって生じたS					1/0							1/0							1/1					1/1
ポストプレーによって生じたシュート						1/0						1/0				1/1		1/1						2/2
フリースローからのシュート				1/0								1/0		2/1	1/0		2/0							5/1
7mスロー				4/3								4/3 0.75		1/0		2/0								3/0
其の他特殊なS																								
計		3/3	2/2	3/0	7/3	2/0	6/1					23/9		9/4	4/0	7/1	5/0	4/1	6/2					35/8

チーム名	大崎電気 6 — 5 三菱鉛筆																							
選手名																								
背番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
ジャンプシュート ◎得点 ○不成功		9/1	7/0	4/1	3/0		2/1					25/2		2/0	1/0	1/0		2/0	3/0			4/0		13/0
ランニングシュート																								
スタンデングS ステップS					1/0							1/0										3/1		3/1
フエント・S（1:1等の情況より相手を抜いた時）																			1/1					
ブロンジョンS 飛び込み（低） 倒れ込み		3/1		1/1	1/0		3/0	1/0				11/2			2/1	2/0		1/0	2/1			1/1		8/3
速攻によって生じたS								1/0				1/0												
ポストプレーによって生じたシュート					1/0							1/0		1/0										1/0
フリースローからのシュート		2/0	1/0									3/0		1/0								3/0		4/0
7mスロー		2/1						1/1				3/2		1/0								1/0		2/0
其の他特殊なS																								
計		10/3	8/0	7/2	6/0		5/0	3/1				45/6		5/0	3/1	3/0		3/0	6/2			12/2		32/5

チーム名	大洋デパート 7 — 6 大崎電気																							
選手名																								
背番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
ジャンプシュート ◎得点 ○不成功	4/1	1/0	2/0			4/0						11/1		8/1	4/1	3/0	3/1		1/0					19/3
ランニングシュート																								
スタンデングS ステップS		4/1	5/0	1/0	2/1		3/2					15/2							1/1					1/1
フエント・S（1:1等の情況より相手を抜いた時）							1/1					1/1												
ブロンジョンS 飛び込み（低） 倒れ込み			2/0	1/0								3/0			2/0		1/0		1/1					4/1
速攻によって生じたS			1/1									1/1												
ポストプレーによって生じたシュート			1/1			1/0	1/1					3/2												
フリースローからのシュート		1/0		1/0	2/0		2/0					6/0			1/0									
7mスロー														1/1										
其の他特殊なS																								
計		9/2	10/2	5/0	4/1	1/0	11/2					40/7		9/2	7/1	3/0	4/1		3/2					26/6

ブロック高校選手権

第14回 関東高校

8月11日から14日まで群馬県・富岡市に関東8県から男女それぞれ32校、合わせて64校が参加して開かれ男女とも広島インター・ハイの代表校がこの大会でも安定したチーム力を示し上位に勝ち進んだ。

その結果男子は中大附属と神代の東京同士で優勝を争い、全日本高校準優勝の地力を見せた中大附属が初優勝した。東京代表の優勝は6年連続9度目。6連ぱを狙っていた明星（東京）は、2回戦で敗退。

女子は、インター・ハイのベストエイトに残った栃木女と深谷女（埼玉）の決勝となり、接戦の末、栃木女が深谷女の2連ぱを阻んで2年ぶり8度目の優勝を飾った。

▼男子1回戦

富岡（群）11—7 土浦工（茨）
桐生工（群）16—10 木更津（千）
石岡一（茨）15—6 前橋商（群）
塩山商（山）12—9 甘楽農（群）
葛西工（東）15—6 足利商（栃）
明星（東）31—10 大宮（埼）
中大附（東）11—5 日川（山）
国立（東）12—9 園芸（山）
相模台（神）16—7 聖望学（埼）
麻生（茨）17—5 横浜商（神）
横浜南（神）17—9 都二商（東）
神代（東）1—0 浦和工（埼）
（注）浦和工が登録外選手を出場させたため没収試合
国学院栃木 13—10 竜崎一（茨）
浦和市（埼）13—8 宇都宮工（栃）
足利工（栃）16—10 機山工（山）
鶴舞（千）8—7 横浜市商（神）
（注）（ ）内の群は群馬、茨は茨城、山は山梨、東は東京、神は神奈川、埼は埼玉、栃は栃木、千は千葉県の略。女子1回戦も同じ

▽同2回戦

国学院栃木 17—8 横浜南
塩山商 16—13 国立
富岡 13—11 桐生工
足利工 15—14 浦和市立
神代 20—4 鶴舞
麻生 23—6 葛西工
相模台工 11—10 石岡一
中大附属 17—9 明星

▽同準々決勝

富岡 15—9 国学院栃木
神代 17—8 相模台工
足利工 15—11 塩山商
中大附属 14—13 麻生

▽同準決勝

中大附属 20（11—6、9—8）14 足利工
神代 15（6—3、9—5）8 富岡

▽同3位決定戦

富岡 14（7—6、7—7）13 足利工

▽同決勝

中大附属 15（7—3、8—9）12 神代

▼女子1回戦

江南（神）9—7 高崎市女（群）
前橋女（群）8—4 浦和市女（埼）
日川（山）19—9 高崎女（群）
八郷（茨）11—7 富岡（群）
熊谷商（埼）4—4 佼成学園（東）
抽せんで熊谷商の勝ち
足利女（栃）8—7 山梨女（山）
水海二（茨）18—4 大津（神）
国学二（栃）13—3 甲府二（山）
深谷女（埼）11—6 石岡二（茨）
神代（東）8—5 佐原女（千）
小平（東）5—3 浦和南（埼）
栃木女（栃）7—4 桜水商（東）
笠間（茨）9—7 小山城南（栃）
都五商（東）11—5 北鎌倉（神）
菊華（東）6—4 八千代（千）
市川崎（神）5—3 塩山商（山）

▽同2回戦

菊華 11—8 足利女
栃木女 7—4 八郷
都五商 9—8 神代
市立川崎 10—8 笠間
小平 8—5 水海道二
深谷女 10—5 国学院栃木
日川 8—7 前橋市女
平塚江南 7—1 熊谷商

▽同準々決勝

栃木女 7—3 都五商
小平 10—2 日川
市立川崎 8—7 菊華
深谷女 13—4 平塚江南

▽同準決勝

栃木女 10（5—1、5—1）2 小平
深谷女 13（6—2、7—4）6 市立川崎

▽同3位決定戦

小平 9（2—2、7—2）4 市立川崎

▽同決勝

栃木女 8（4—3、4—3）6 深谷女

第18回 九州高校

7月21、22の両日長崎市営球技場に九州7県の予選勝者男子7（佐賀を除く）、女子8校が参加して開かれた。

男子は、熊本市商がすばらしい攻撃力をみせて、2連勝を狙う鶴崎工（大分）らを降し、2年ぶり7回目の優勝を飾った。

女子も、菊池農（熊本）が圧倒的な攻守で、各試合いずれも前半で勝負を決める力を示し2年ぶり5回目の優勝をとげた。熊本代表の男女制はは2年ぶり5回目。

▼男子1回戦（3試合）

若松（福岡）17（9—5、8—5）10 口加（長崎）
鹿町工（長崎）15（6—7、9—7）14 鹿児島工（鹿児島）
熊本市商（熊本）27（10—4、17—0）4 都城工（宮崎）

▽同準決勝

鶴崎工（大分）17（7—8、10—7）15 若松
熊本市商 17（8—3、9—5）8 鹿町工

▽同3位決定戦

若松 14（5—8、9—3）11 鹿町工

▽同決勝

熊本市商 20（8—4、12—5）9 鶴崎工

▼女子準々決勝（＝1回戦）

加治木（鹿児島）17（5—2、12—2）4 都城西（宮崎）
島原農（長崎）14（5—0、9—2）2 神崎農（佐賀）
菊池農（熊本）20（11—1、9—2）3 佐世保商（長崎）
明善（福岡）13（5—4、8—4）8 玖珠農（大分）

▽同準決勝

島原農 7（1—2、6—4）6 加治木
菊池農 19（8—1、11—4）5 明善

▽同3位決定戦

明善 10（6—2、4—1）3 加治木

▽同決勝

菊池農 17（7—1、10—2）3 島原農

東北は大石田と全岩手女

第21回東北高校選手権の男子は、各試合とも接戦になったが大石田（山形）が決勝で大曲（秋田）を1点差で降し2連勝。女子は、花巻南、花巻農を主力とした全岩手が安定した攻守で初優勝した。（詳報次号）

各地の記録（寄稿歓迎）

東北大が2連勝飾る

第12回国立8大学大会（兼第7回国立7大学総合体育大会）は7月21日から26日まで名古屋の金山体育館で開かれ、リーグ戦の結果東北大、名古屋大がともに6勝1敗で同率となったが得失点差で東北大が上廻り2連勝を決めた。

京都大 19—12 神戸大
大阪大 30—17 北海道大
東北大 24—16 九州大
京都大 24—12 東京大
名古屋大 17—9 神戸大
東北大 20—13 大阪大
神戸大 18—13 東京大
名古屋大 23—14 京都大
九州大 16—15 北海道大
大阪大 18—13 東京大
東北大 17—16 神戸大
名古屋大 20—12 北海道大
名古屋大 19—9 東京大
九州大 14—10 神戸大
東北大 29—6 北海道大
大阪大 21—9 京都大
名古屋大 26—14 九州大
東京大 22—9 北海道大
大阪大 14—12 九州大
東北大 18—8 東京大
京都大 41—18 北海道大
神戸大 13—7 大阪大
名古屋大 12—11 東北大
京都大 22—15 九州大
九州大 14—7 東京大
北海道大 19—13 神戸大
大阪大 14—12 名古屋大
東北大 15—12 京都大

①東北大6勝1敗（得失点差51）②名古屋大6勝1敗（得失点差46）、③大阪大5勝2敗、④京都大4勝3敗、⑤九州大3勝4敗、⑥神戸大2勝5敗、⑦東京大1勝6敗（得失点差マイナス36）、⑧北海道大1勝6敗（得失点差マイナス75）

仙台二、涌谷など勝つ

▼第21回宮城県民体育大会ハンドボール兼宮城協会創立20周年記念大会（8月・古川女高体育館ほか）

▽高校男子準々決勝
仙台二 17—6 仙台育英
仙台一 8—7 塩釜
仙台商 18—8 東北
古川 9—4 古川工

▽同準決勝
仙台二 14—8 仙台一
古川 14—10 仙台商

▽同決勝
仙台二 7（2—1、5—3）4 古川

▽同女子準々決勝（＝1回戦）
宮城三女 19—13 古川女
祇園寺 21—5 宮城一女
涌谷 13—7 宮城二女
古川商 不戦勝

▽同準決勝
宮城三女 11—7 祇園寺
涌谷 8—5 古川商

▽同決勝
涌谷 14（10—6、4—3）9 宮城三女

▽一般男子1回戦（1試合）
仙台商ＯＢ 35—18 仙台自衛隊

▽同準決勝
東北学院ＯＢ会 28—10 仙台商ＯＢ
古川工ＯＢ 25—12 船岡自衛隊

▽同決勝
東北学院ＯＢ会 19（8—4、11—8）12 古川工ＯＢ

一般で倉敷工ＯＢ優勝

▼岡山県体育大会ハンドボール（8月・操山高）

▽高校男子準々決勝
操山 8—7 倉敷商
倉敷工 8—6 矢掛
天城 12—9 津山工
高校選抜 23—5 玉野

▽同準決勝
高校選抜 24—8 天城
倉敷工 12—7 操山

▽同決勝
高校選抜 17（10—2、7—5）7 倉敷工

▽同女子準々決勝（＝1回戦）
津山商 20—4 青山
井原 9—6 西大寺
真備 16—3 金川
高校選抜 不戦勝

▽同準決勝
高校選抜 16—1 津山商
井原 6—3 真備

▽同決勝
高校選抜 11（6—2、5—3）5 井原

（注）男女とも「高校選抜」は国体に備えて編成されたチーム

▽一般男子決勝
倉敷工ＯＢ 31（16—8、15—9）17 岡山工ＯＢ

▽同女子決勝
井原ＯＧ 14（7—0、7—2）2 岡山ク

自衛隊勝田が優勝

▼茨城県一般男子選手権（7月・勝田市）

▽1回戦（1試合）
亀丘ク 16—13 水戸工ＯＢ

▽準決勝
自衛隊勝田 31—6 原子力研究所
亀丘ク 28—14 茨苑ク

▽3位決定戦
原子力研究所 32—16 茨苑ク

▽同決勝
自衛隊勝田 14（8—7、6—2）9 亀丘ク

編集後記

インターハイ・総合・教職員と夏の大会はおわりました。今回は、この大会と下関中央工の韓国遠征を主にまとめました。韓国高校は予想通り強力でした。チェコ問題がおこり、我々の世界にも大きな波紋を投げそうです。（ＴＦ）

10

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第五十七号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十三年八月二十五日印刷 昭和四十三年九月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円（年間購読11回・千二百円）